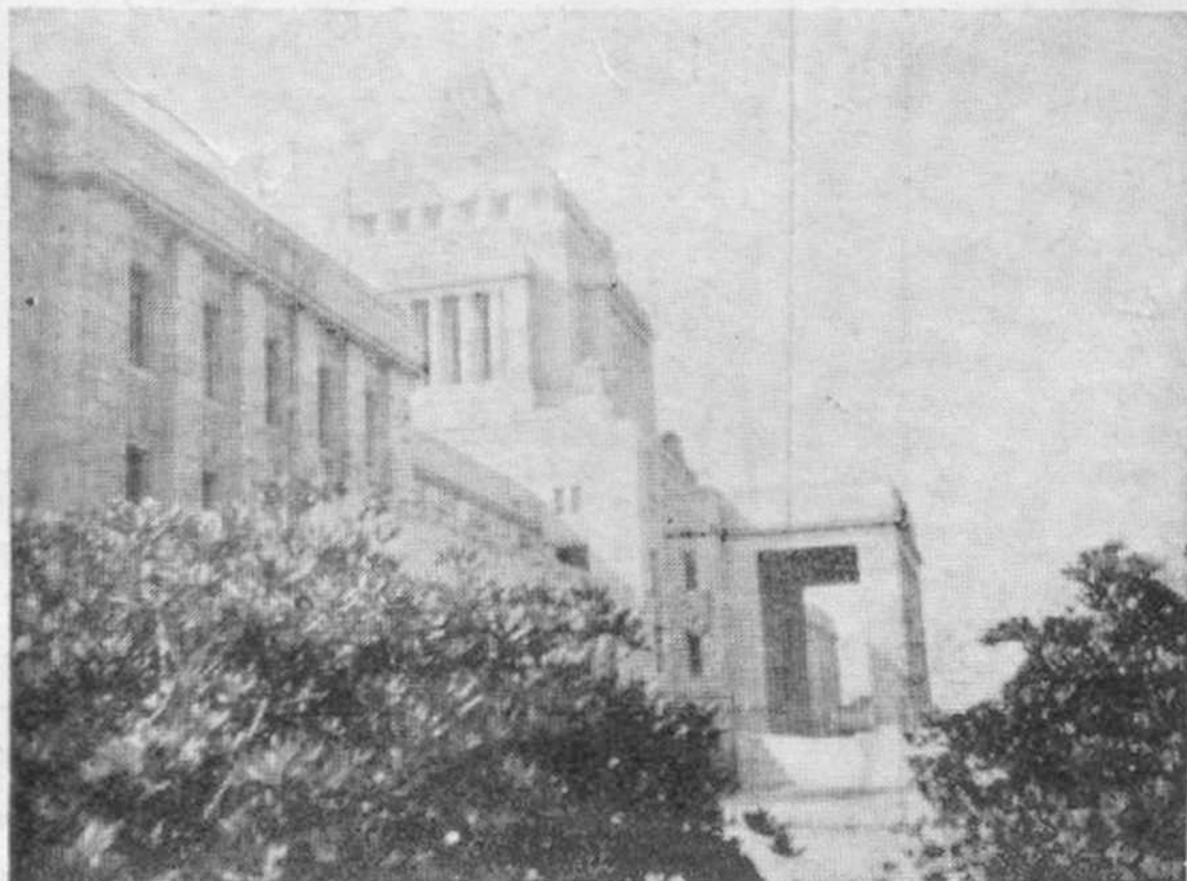
昭和七年一月十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行
昭和十四年五月十日印刷納本　昭和十四年六月一日發行　第七年第六號

エスペラント

LA REVUO ORIENTA

六月號

Jaro 20　N-ro 6



Junio　1939

財團法人 日本エスペラント學會發行圖書

内外發行エスペラント圖書のくはしい目錄は往復はがきでお申込み次第お送りします

學習書・教科書・辭典

		定價圓	送料錢
エスペラント捷徑	多少外國語の素養ある人のため最良の獨習書	0.50	6
エスペラント講座	外國語を全然知らぬ人にABCから教へる講座	0.50	6
エスペラント案內	エスペラントとは何かから始め文法全般まで	0.30	3
新撰エス和辭典	語數豐富，譯語正確，携帶至便 上 0.80 6 並	0.60	6
新撰和エス辭典	見出語數6萬，出典明示，附錄豐富，印刷鮮明	2.50	6

點字エスペラント文法と小辭典	1.00	6	エスペラントの鍵	0.05	3
エスペラント初等讀本	0.30	3	エスペラント講習用書	0.30	3
エスペラント中等讀本	0.30	3	エスペラント短期講習用書	0.20	3
エスペラント童話讀本	0.20	3	イソップ物語 深切明快・脚註付	0.25	3

ザメンホフ讀本	ザ著作拔萃 I 翻譯篇，II 原作篇，III. ザメンホフ論	各 0.20 合卷 0.50	3 6
エスペラント醫學文範	醫學論文の好模範，醫學生の講習會用に最好適	0.40	3
エスペラント文例集	重要單語 720 造語例文例 0.80 6 函入カード版	1.50	14
新撰エスペラント手紙の書方	例文豐富，書翰百科辭典の觀，370 頁	1.20	10
エスペラント日記の書方	365日 1日1例文，社會萬般の記錄，譯註付	1.20	9
エスペラント發音研究	エスペラント發音上の疑問の點は何でもわかる	0.30	3
リングヴァイ・レスポンドイ	ザメンホフの質疑應答集，學習者必備の書	0.50	6

エスペラント文庫

ザメンホフの生涯 0.40 6　國際運信の常識 0.50 3　エスペラントの會話 0.40 3

エスペラント文藝讀本

スラヴ篇 ツルゲネフ，チェホフ	0.25	3	フランス篇 ドォデ，ユゥゴォ等	0.25	3
沙翁悲劇篇 ハムレット他 3	0.30	3	北歐篇 付「アンデルセンと Z」	0.30	3

對譯詳註書

マテオ・ファルコネ メリメ作	0.30	3	代理通譯 ベルナール作	0.30	3
ハイネ詩集 珠玉の詩 40 篇	0.30	3	魔法使 ザイデル爐邊物語から	0.30	3
レイモント短篇集 2 篇	0.30	3	エスペラント童話集	0.70	3

愛あるところ神あり　トルストイ作。附「エス語研究書解題」。282頁　1.50　9

エスペラント書き文獻

日本書紀　I 神代紀・神武天皇紀　II 綏靖天皇紀——應神天皇紀　III 仁德天皇紀——宣化天皇紀　IV 欽明天皇紀——皇極天皇紀　I, II, III 各 1.20 9　IV 1.80 10

惜しみなく愛は奪ふ 有島武郎著	0.75	6	ヴ ルダ・カルト 石原榮三郎作	1.00	6
中村博士遺稿集 原作，翻譯	0.70	6	海神丸 野上彌生子作	0.40	3
東洋の俠血兒 長谷川伸作	0.45	6	倫敦塔 夏目漱石作	0.15	3
霧の中 山本有三作ラジオ劇	0.15	3	日本民族の起源	0.10	3
佛說阿彌陀經	0.15	3	日本小史 野村佐一郎著	0.20	3
大學中庸 特 0.75 6 並	0.60	9	孝經	0.30	3

歐羅巴親類廻り　上 0.95 10　並 0.35 10　國語擁護を論じて國際語に及ぶ　0.20 3

本鄉元町1丁目・振替東京 11325 番

エスペラント
LA REVUO ORIENTA
• Junio 1939 •

表紙: El la japana arkitekturo — Parlamenta Domo
扉: 會費について
Membrokotizo

LA ENHAVO

エスペラント

六月號

會費について

昨年の學會維持員會總會において，進藤靜太郎氏が，學會の會計報告の數字から割出して，學會の諸費用は，會員1人あたり4圓なにがしかにあたるが，これが不足をどうして補塡するかと質問された。これに對し，學會は圖書部の利益金を融通させていると答え，別に小坂氏から，なるべく多くの人たちが賛助會員あるいは特別會員になり學會の財政の基礎を固めることに力をあわせるようにとすすめられた。

今年の大會にあたつても，地方からの，少なからぬ會員諸氏が，會費を値上げしてはどうかと，個人的にではあつたが，熱心にすすめられた。

このことは，すでに學會內部でも問題になつたことではあるが，多くの會員の事情を考えて，そのつど延期していたのであつた。

今年もそのことが問題となつたのであるが，會費の値上げは，物價抑制の國策にも副わないことでもあるので，今年もまた，學會總會の議案として取上げるにいたらなかつた。

しかし，1昨年以來，用紙代や印刷費もかなりあがつているため機關誌の費用が相當膨脹している。20錢とゆう誌代はもともとやすかつたのであるが，現在では，製作費用に較べてやすすぎるのである。

してみると，普通維持員費2圓40錢は單に誌代としてみてもやすすぎるのであるが，考えなければならないことは，會費は雜誌代でないとゆうことである。

會費と雜誌代とを，日本人はとかく混同しやすいのであるが，會費は，わかりきつたことながら，まず運動の費用にあてるべき性質のもので，雜誌代は，その1部となるべきはずのものである。

ところが，實際問題としては，雜誌代が會費の大部分をしめているがため，運動には，財政的には手がまわりかね，その運動のためには，エスペラント運動後援會のようなものを作らなければならなくなつたのである。

運動後援會のようなゆき方は變則であつて，これは，長くつづけてゆくべき性質のものではない。運動の費用は，會費によつてまかなわれてのみ健全な狀態にあると云い得るのである。

今回日本文化宣揚部を作り，われわれのエスペランティストとしての國民的使命をはたす道を恒久的なものにすることに定めた今は，特に，この點を强めていいたい。

『健全な運動は健全な會費から。』これを moto としてすすみたいのであるが，それを實行するには，ふたつの點について，會員全部の御協力をお願いしたい。

1. 會費を akurate に拂込むこと。

會費拂込みの malakurateco から蒙むるわれわれの時間，勞力，財政のうえのむだづかいは，はなはだ大きい。會費前金が切れたときは，すぐ次年度分を拂いこむこと，これを正確に實行していただきたい。

2. なるべく會費を多くはらうこと。

これは，いままでの普通維持員は賛助維持員に，賛助維持員は特別維持員に，それぞれ資格を變更していただきたいとゆうことである。すくなくとも，かつがつ雜誌の原價になるだけの普通維持員にとどまることは，よほどの事情のあるばあいをのぞいて，さけていただけるならば，ありがたいとおもう。（M）

大會の日記

2600年は祖國日向の首都で！

去年は11月，ことしは4月——名古屋と大阪とのあいだの距離がみじかいように，第26回と第27回とのあいだもわづかに半ケ年——だが，事變のもとの社會の移り變りがはげしいように，その6ケ月もあわただしく過ぎさつた。

4月27日——きようは，自分が受持つていた，ことしの第1回講習會の初等科の最後の日である。きのう萬澤さんがみえて，今夜の9時半ので，柏原さん，荒井さんなどと一緒に行くがと，誘つてくださつたが，9時に講習をすませて，それから，すぐ驅けつければ，まにあわないでもないが，講習がはじまる7時までに出發の準備ができあがるかどうか，わからなくて，約束はしなかつた。はたして。乘つたのは11時發の下關行。

4月28日。どこへ行くにも，仕事の都合で，ぎりぎりまで，出發の時間がきめられないため，寢臺をとることは，いつもできない。

さいわい，かなり空いていたので，2人分の座席を占領することができ，あさいながらも眠りをとることができた。

彥根あたりでめがさめる。それに，乘客もいつのあいだにかふえていたので，坐り直す。そして，携えて來た「エスペラント」の原稿を鞄からとり出して，「ショウバイ」をはじめる。

京都。

學生あがりらしい若い出征軍人が，父親にともなわれて，乘りこむ。席を讓る人があつて，父親がわたしのとなりに坐る。こんどはそれとむかいあつた人が，軍人のほうへ席を讓る。腰をおろそうとする息をおしとどめて「うしろむきに走つては」出征軍人に緣起がわるいと，席をとりかえてやる。そこで，この青年は，いつも列車の走る方向にむかつて坐ることにしているわたしの横に坐ることになつた。

そのとき，ちらりと，彼は，わたしの手にした原稿を見たらしい。

「あなたはエスペラントをやつていられるのですか」と，おもいがけない質問である。

「ええ。」わたしは名刺をとり出した。「あなたもですか」。

この青年は，田所昭良さんといい，去年，中原さんのところで，エスペラントをはじめたとのこと。善通寺の隊にはいるこの人を見送つて，京都驛には野島安太郎さんもみえていたとゆう。西村さん，杉村さん，木村さん……神戶——時間があるので，わたしは，神戶へ寄ることにしている——までの1時間半に，いろいろな名まえが話題にのぼる。

5時ころ，大阪驛におりる。出口に，綠星旗をもつて來ているはずの人たちが見えない。大阪の地理には，やや明るいのであるが賣店の荷物をどうするかの問題があるので，まごまごしていると，やがて，おなじくうろうろしながら，名古屋の淺野さんと高松さんとが現れる。まもなく，京都の赤田さん。また1人——赤田さんへ話しかけながらやつて來る。機關誌の報道欄の寫眞で見おぼえがある。野島さんだな，とおもつていると，「さつきお話しの野島さんですよ」と紹介される。いつまで待つてもきりがないので，市設案內所へたのんで，池川さんに聯絡をとつていただき，今晩の會場へむかう。

日淸生命館の6階。

エレベーターを降りたとたん，1歩もあるかないところに受附がある。伊藤さん，兒島さん，城戶崎さん，進藤さん，等，等，等の顏，顏，顏。

參加章，Kongreskarto, Kongreslibro,「大

會要綱」等のはいつた袋をわたされる。

第25回の大會の參加章が，argenta jubileo にちなんだ銀メダル，第26回名古屋は，代用品のボーンチャイナ，そして，ことしのは，楠に彫りこんだ澁いもの。

"Kongreslibro" の第 1 ペイジに，ずらりとならべられた「大會名譽顧問」は，

大阪帝大總長	楠本長三郎
大阪商大學長	河田嗣郎
大阪外語校長	葉山萬次郎
大阪商船社長	村田省藏
大阪朝日社長	上野精一
商工會議所會頭	安宅彌吉
同　副會頭	片岡安
栗本鐵工所社長	栗本勇之助
貴族員議員	佐々木八十八

とゆう豪華絢爛たる顔ぶれである。

荷物のことについて，賣店掛りを引きうけてくださつていた田中さんに相談すると，

「實は……」いはれると。

公會堂では，賣店を絕對に出させないことになつているとゆう——それが，やつときのうわかつたとゆうのである。

こうとわかつていたら——とおもつたが，もうおつつかない。氣の毒なのは婦人聯盟である。この大會をあてこんで，エハガキを作り，それを賣つて，事業基金を作るつもりでいた——しかも，その desegno が，この機會をはずしては，このつぎにまた，大阪で大會の開かれるのを氣ながに待たなければ，はけそうもないとゆうシロモノである。

やむを得ない，今夜の會場に店を出すことにして，荷物をとり寄せていただく。

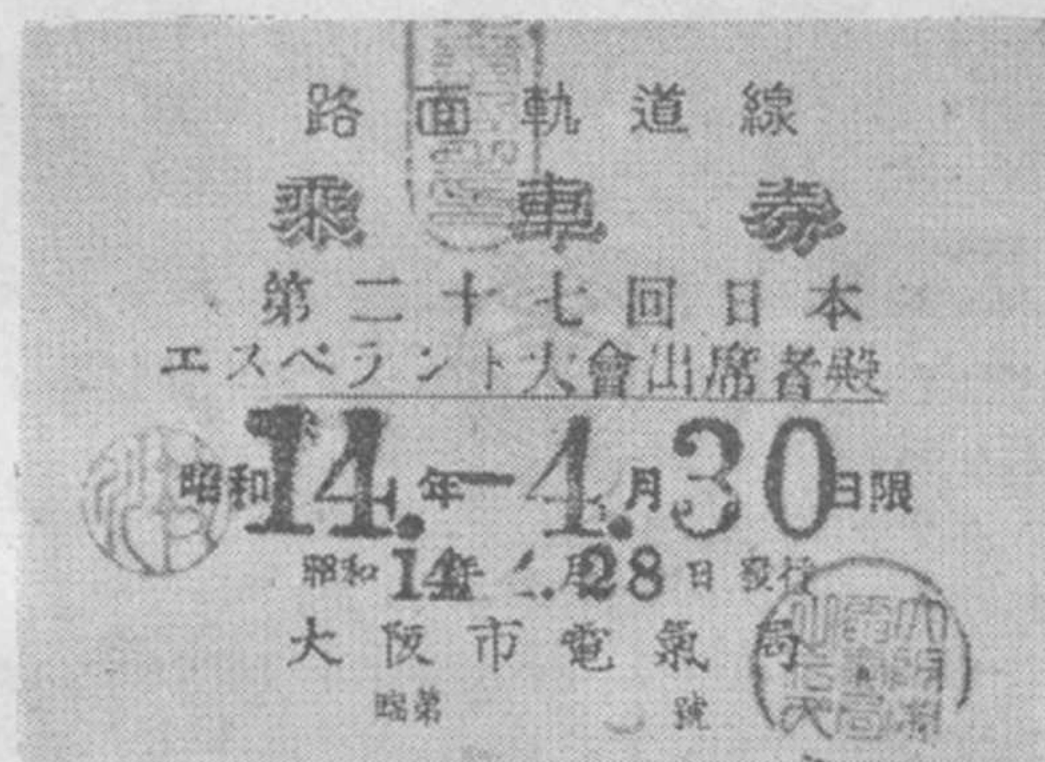
それでも賣上金 23 圓なにがしになつた。

會場の壁にかけられた小坂賞の壁掛皿が人目をひく。時間が來て席につくと　この懇親會の出席者は，およそ 120 人。これでは，疑いぶかい人たちのいわゆる「闇取引」はできそうもない。

食事がおわると，伊藤幸一氏の司會で，まず自己紹介——といつても，進藤さんが，出席者の名まえを，1 人，1 人讀みあげ，呼ばれたものが立ちあがつて，頭をさげるだけである。これはよい先例となるであろう。

それから，中目會長はじめ，つぎつぎにいろいろの人の挨拶。わたしは，司會者の注文で，學會に洋書の在庫のすくなくなつた理由を辨解させられた。

市電の無賃乘車券がわたされる。


路面軌道線
乘車券
第二十七回日本
エスペラント大會出席者殿
昭和14年4月30日限
昭和14年4月28日發行
大阪市電氣局
第　號

愉快な雰圍氣のなかに會がとじられたのは 10 時。

今晩は，25 年のあいだの親しい友人川崎直一君のお宅にとめていただく。地下鐵で行くほうが早いのであるが，せつかくいただいた無賃乘車券を使いたく，指定されている「路面軌道線」で行く。

29 日。天長節日和だ。

9 時 15 分，池川濤氏司會のもとに

天長節祝典がはじまる。

「君が代」の齊唱。

皇居遙拜。

皇軍將兵武運長久默禱。

ついで，中目準備委員會長の發聲で，

聖壽萬歲三唱。

大會發會式にうつる。

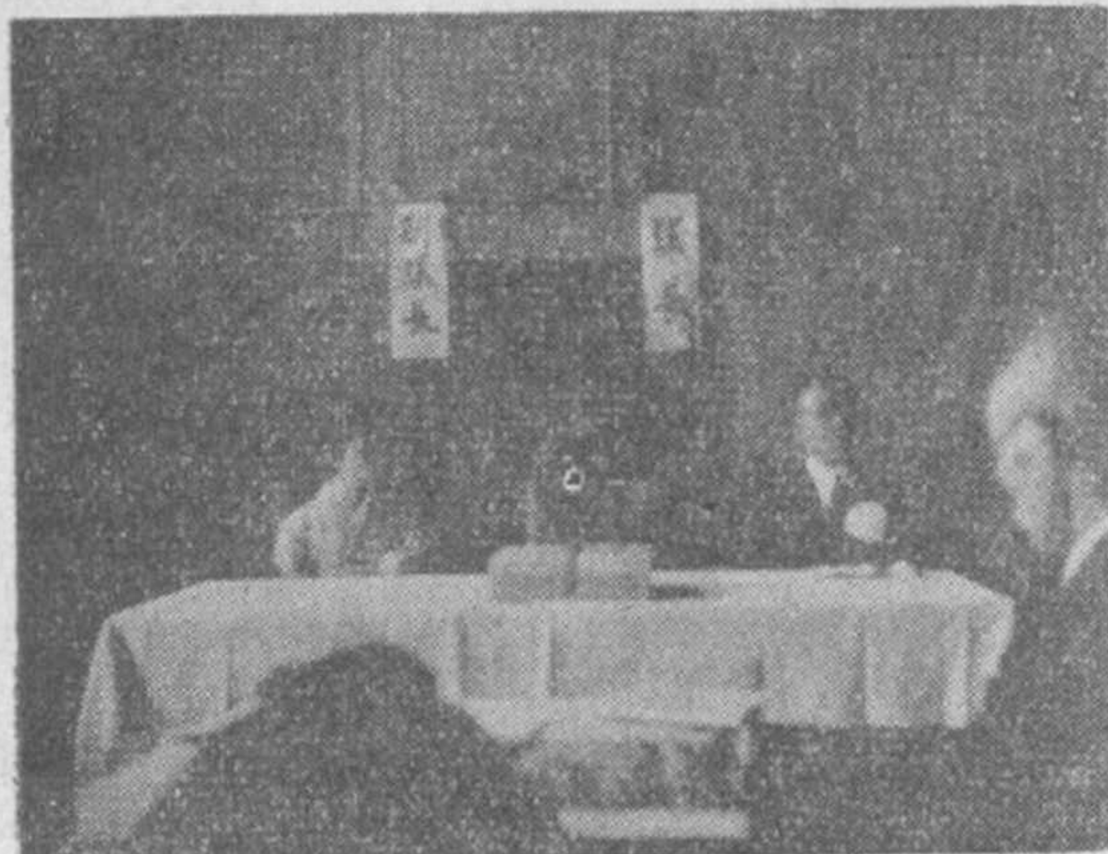
大會役員の選擧——例によつて進行係桑原氏の動議で，司會者から指名。

會頭は，元大阪外語學校校長，現同校名譽敎授の中目覺氏。

副會頭は，大阪市商工課長草刈孟氏，城戸崎ひな子夫人，進藤靜太郎氏。

準備委員會を代表して，兒島壯一氏が挨拶される。11年目に再び大阪へ大會を迎えることをよろこび，準備の經過を報告する。

中目會頭の挨拶。poligloto の「怪物」とよ



ばれる中目氏は，エスペラントでも「怪物」ぶりを發揮される。

クラクフの第8回萬國エスペラント大會におけるザメンホフの演說の1節，

"Antaŭ dudek kvin jaroj mi timeme demandis min, ĉu post dudek kvin jaroj iu en la mondo scios ankoraŭ, ke ekzistis iam Esperanto, kaj — se Esperanto vivos — ĉu oni tiam povos ankoraŭ kompreni ion, kio estis skribita en Esperanto en ĝia unua jaro, kaj ĉu angla esperantisto povos kompreni esperantiston hispanan."

をひいて，そのときから，また 25 年，"Se Zamenhof estus ĉi tie, li ne kredus siajn okulojn kaj dirus, ĉu tio ne estas sonĝo." といい，かかる盛大な大會を開くにいたるについて拂われた準備委員諸氏のなみなみならぬ勞を犒われた。

大會參加者を代表して，名古屋エスペラント會會員の資格で，小坂狷二氏の挨拶:——

11 年まえ大阪で開かれた第16回大會に際して出逢つた困難にひきくらべ，今回の大會に對して示された各方面の理解の深さに驚くといい，さらに 25 年まえ，大阪を訪れられたとき，大阪のエスペランティストのかずはわずか2-3人にすぎなかつたことをのべ，今日この盛んなありさまとなるにいたつたことをほめたたえられる。

伊藤氏によつて，國の內外からの祝辭，祝電が披露される。

なかにも，いま，10ケ月にちかいヨーロッパの旅をおえて，地中海を，故國へいそぎつつある久保貞次郎氏からのものは，うれしいものであつた。

エスペランティスト學力試驗委員會の報告——三宅から，試驗制度設定について，簡單に經過を報告し，第1回普通試驗合格者の氏名を讀みあげる。

ひきつづき，その合格者に對する學力認定證の授與式。副會頭城戸崎ひな子夫人から，合格者代表，證書番號 N-ro 1 の野原信子夫人へ證書が渡される。

つぎは，小坂賞授與式。

まず，小坂賞委員會幹事桑原利秀氏から，小坂賞に關する報告が述べられる。小坂賞設定にいたる經過，第1回受賞者が野原氏に決定するにいたつた事情を述べ，また，基金の寄附が，豫定の額にたちまち達したについて，小坂氏が衆望を擔つていられるゆえんであるとし，さらに，受賞者野原翁の功績を賞揚される。

會場にとどろきわたる拍手のあらしをあびて，野原氏が，小坂氏から，壁掛皿を授けられる。

受賞者記念講演——野原休一氏の感想が語られる。

『多士濟々の中から，委員會が，なにを苦しんで，この sentaŭga maljunulo に，光榮ある第1回小坂賞を冒瀆せしめたか，これを疑問とするは，自分のみであるまい』——とゆう謙遜なことば。『おもうに，これは，委員會が死馬の骨の故事に倣うたものであろう。今度學會に日本文化宣揚部が設けられたが，日本文化の世界的宣揚こそ，今日，日本のエスペランティストに課せられた責務である。しかして，古典の翻譯もまた，文化宣揚の1部門であろう。してみると，この際，この方面から千里の駒の出ることを望むのあまり，あやまつて，死馬の骨にもしかざる，不完全極まる私の事業に對して榮譽を與えられたのであろう。そう解釋して，あえて，これを，感謝して受ける』

大會協議會にうつり，司會者が貫名美隆氏にかわる。

プログラムの順序をかえて，第1に，小笠原譽志夫氏の特別講演。

『ヨーロッパは，いまや一觸卽發の危險にさ

らされている。ミュンヘン會議を終えて歸つて來たチェンバレン首相を迎えたロンドン市民は，あたかも，凱旋將軍を迎えるかの如くであつた。これに對して，チェンバレンは，ここ 10 年間は，ヨーロッパの平和は確實であると言つた。ところが，半年後には，チェコはドイツに合併した。イギリス，フランスは狼狽し，ドイツを攻撃した。ヒトラーはこれに答え，チェコは自發的にドイツに合併したもので，ミュンヘン會議の蹂躪ではないと言つた。ドイツを滿足せしめないかぎり平和はない。イギリスがインドの領有をつづけていることは，東洋平和のためにゆるされない。イギリスは世界の 4 分の 1 を領有しているが，これでは世界平和は不可能である。これを返還することはむずかしいが，關税，移民の制限を緩和しなければならない。さらに，英語を世界の公用語かのごとくに强制しているが，これは世界を植民地あつかいにするものである。われらエスペランティストは，世界がエスペラントを公用語として採用するよう努力しなければならない。この意味で，エスペラントが世界に普及されることが望ましい。自分は，事變發生以來，日本の立場を説明するため努力をつづけているが，こちらの云い分をなかなか納得してくれない。支那のエスペランティストも香港から，さかんにデマ宣傳をしている。日本のエスペランティストも，これにまけず，さかんに文通して，あくまで眞相を説明しなければならない。』

このとき，緊急動議があり，名古屋エスペラント會の白木欽松氏が立つて，今回の大會開催に際し，多大な好意を示された大阪市當局に對し，感謝の決議をしたいといい，大阪市の產業都市としての發展とともに，その文化面の發展に言及し，市當局の庇護，諸名士により代表された各方面の深い理解に對する感謝の辭を盛つた決議文草案を讀み，滿場一致をもつて可決。

議案 1.「大會は，財團法人日本エスペラント學會を，日本エスペラント運動の中心機關として推戴すること」神戶エスペラント協會提出。



提案者を代表して，日本エスペラント運動の長老たる日本喜多治氏が說明に立たれる。

まず學會創立以來の，運動に對する功績を述べ，ついで財團法人たる學會と，IEL の landa asocio たる學會との關係について，またさらに，岡山大會以來の，大會を常設機關たらしめようとする試み――それと學會との關係等を說明し，最後に，學會と大會との二位一體の實現を望み，學會を，大會の名において，あらためて日本のエスペラント運動の中心機關として推戴しようとゆうのである。

これに對し，土師孝三郎氏から，「中心機關」なる語義について質問があり，月本氏これに答え，採決の結果，全會一致で可決。

三宅は，これに對し，提出者の意のあるところと，全會一致の熱心な贊成に對し感謝のことばを述べ，この趣旨を學會役員會へ傳えることを約束した。

議案 2.「地方會並ビ＝分科會＝關スル大會規約，決議委員會規約」設定について。

これは，R.O. 2 月號に「大會規約案ふたつ」として出されたもの。提案者進藤靜太郎氏が說明に立つ。

例えば，明年度大會が宮崎で開かれるとする。そうなれば，さつそく財政問題にぶつかることになる。大會の費用は，主催地の負擔にのみまかすべきではないとゆうのである。

これに對して，小坂氏から質問。

1) 會費の支拂いについては，大きな困難がともなう。大會の費用は，大會每に寄附金を募つて，これによつてまかなうがよい。

2) この案は公平を期するように見えて，實は voĉo を aĉeti aŭ subaĉeti することに

なりはしないか——と，例の bonhumoraĵo をまじえて——もう1年のばして，研究してみてはどうか。

池川清氏：——この案文を刮目して見よ。知らずに賛成するな。會費1人1圓はたかい。

松田周次氏：——形式はよいが，その實，實行は不可能である。これは，金額の多い少いについてゆうのではない。義務となれば，學會の會費すらとかく拂い難い。これはあまりに severa である。

白木欽松氏：——まつたく同感である。

野島安太郎氏：——これは重大な問題であるから，個人的に賛否を述べるべきものではない。それぞれ地方の同志に相談しなければならない。

伊藤幸一氏：——日本のエスペラント運動の最近の勃興期にこの提案の出たことは感謝に堪えない。いまさら地方の同志に相談するがものはない。すでにはやくから R.O. に出ているではないか。大會を開くのは，大都會でばかりではない。地方でも開きたい。

池川氏緊急動機として，これを小委員會の議に附せよとゆう。

進藤氏：——議論が否定的であることは遺憾である。議論を具體的に進行してほしい。あやふやな全體論はすでにききあきている。

決がとられる。

「反對者は手をあげよ」——13。

議長は，至極簡單に，「反對は少數，よつてこの議案は可決」と宣してしまつた。一同はしばらく茫然としていたが，やがて，議案自身には反對でない側から，やかましく，採擇に對する反對がわきあがる。そこで，あらためて，

「賛成者は手をあげよ」——25。

よつて，あと百數十名は，反對でもなく，賛成でもないとゆうわけ。

赤田熊義氏：——わたしは，中立の立場を代表して立つた。中立の大多數は修正を要求するのであろう。

議長：——修正意見があるか。

赤田氏：——まだ整つていない。

桑原氏：——議案が徹底していないようである。特別委員會で ellabori してはいかが？委員の顔ぶれは，大會會頭に一任したい。

委員附托に決定する。

議案 3.「來年度大會を宮崎へ招待したい」九州エスペラント聯盟後援，日本エスペラント學會宮崎支部提案。

この使命を帶びて，遠く宮崎市から參加した中川勝八氏が説明。

明年，皇紀 2600 年にあたつて，日本民族の發祥の地，宮崎では，これを祝う祭典が行われる。このときにあたつて，日本のエスペラント大會を，宮崎市に開きたい。われわれ宮崎のエスペランティストの力は弱い。しかし全九州エスペランティストは助力を約束している。

全會一致で賛成。

IEL 代表進藤靜太郎氏の報告。

IEL に對する日本側會員のかずのへつたことについて述べ，日本の威力を示すために，ぜひ積極的支持を與えられよと説く。

正 12 時 —。

記念撮影。



12 時 30 分から，午餐。

12 時 50 分から，各團體代表の挨拶。

日本科學エス協會　橋田慶藏氏

婦人エスペラント聯盟　柏原ひで子孃

鐵道エスペラント聯盟　高橋菊藏氏

東京エスペラント倶樂部　高見宏氏

東京鐵道エスペラント會　荒井　氏

京都エスペラント聯盟　細川卓郎氏

九州エスペラント聯盟
學會宮崎支部　中川勝八氏

カナモジ會　伊藤幸一氏

日本エスペラント學會　大崎和夫氏

ハンガリア・カトリク
エスペラント協會　上月美弘氏

佛教濟世軍　中西義雄氏

佛教エスペラント聯盟　柴山慶氏

特別講演「小坂賞額皿について」
本野精吾氏

小坂賞額皿製作について，その懸賞圖案の選をお願いしたところ，それを快くお引受けくださつたばかりでなく，皿圖案としては不完全である入選作を修作してくださつたうえ製作の方の交渉までしてくださつた京都高等工藝學校教授本野先生の專門的見地からのお話し。皿の製作者は，もつとも良心的，かつ，利益を度外視した態度をもつて，好意的に，この仕事にあたつてくださつたとのこと。

この午餐の時間中に，京都の中原脩司氏は「宮崎の大會を盛んならしめるため，同志はこぞつて，これに財政的援助を與えよ」といつて，5 圓札を 1 枚，中川氏へ渡して，喝采を博した。しかし，その，よき例に倣う人はなかつたようである。

中支戰線に從軍中の里吉重時氏は，友枝夫人にともなわれて，「寫眞參加」をされ，夫人からそれが紹介された。

特別講演　　大阪帝大助教授安田龍夫氏

最近ヨーロッパから歸られた安田氏は，エスペラントの internacieco を取りもどして，日本から强く働きかけて，千萬人といえどもわれ行かんの慨をもつてあたれと叫ばれる。

午後 2 時 5 分から，**財團法人日本エスペラント學會維持員會總會。**

三宅が，開會の挨拶をし，評議員大崎和夫氏を議長に推す。小坂さんが書記を買つて出てくださる。顧問が書記をつとめるなどとはエスペランティストの會以外では，およそ想像もつかないところであろう。

ことしは，いつも會計報告をされる三石さんが御病氣のため參加できないので，會計報告は，印刷物の配布で，これにかえ，事業報告を簡單にかたづける。

議案「內規變更の件」。去年の大會で，學會へ一任された，エスペラント運動後援會の事業の存續案と，日本エスペラント文化協會の創立案との處理策として，學會內に日本文化宣揚部を新設することになつたため生じた內規變更　　といつても，「日本文化宣揚部」とゆう 7 字を入れるだけの形式 ── の必要について，三宅から說明。文句なしに可決。

質問に入つて，中原氏，伊藤氏，多木氏などから，主として洋書の問題について質問。

中原さんは，良書をやすく輸入せよといわれる。

わたしは，たかい，やすいよりも，輸入できるか，できないか，そこが問題──とゆうよりも，不可能にちかいと答える。

小坂さんが，それにつけくわえて，やすく輸入するには，「圓」の相場をたかくするよりほかはない──それには，輸出の振興をはかり……と帝國議會みたいなことになる。

伊藤さんのは，學會が，われわれを滿足させるほど洋書を輸入できなければ，地方會から直接注文してもよいか。學會の利益がなくなるが，それでよいかとゆう質問。

それはやむを得ない。どうせ，學會が必要なだけ輸入することはできないのだから，地方會で，許されているだけ，輸入するのはしかたがない。ただ，地方會で輸入したとき輸入するとき受けるべき rabato の幾部分かを學會へまわしていただけるとありがたいがと答えると，小坂さんが，すぐ，では，名古屋では，rabato 全額を學會を廻わすと約束される。

各地方會とも，その例にならつてほしい──不勞所得のようであるが，地方會の限ら

れたわずかの注文に對して大きな rabato はないのであるから，全部の注文を綜合したものから rabato させ，それだけを書籍でとれば，結局，利益がみなに行きわたるわけ——とゆうと，みな賛成してくださつた。

多木さんは，こちらから輸出してはとゆう意見。

それは意見としては結構，また幾分は實行しているのであるが，現在發行されているものに對して外國からの需要はすくない。ただし，近く，佐々城さんの "Paroladoj de Zamenhof" を出すはず，それが出れば，もつと多く輸出の道がひらけるわけと答える。

あと3分とゆうとき，議長が，質問をうちきり，"Espero" をうたつて閉會にしたい——觀光艇出發の時間がせまつているから——といわれた。すこしまえに質問を通告してあつた中原さんが，ぜひ質問したいといわれる。大崎さんは，時間がないからと斷る。中原さんはそれをおしきつて質問しようとする，そうさせまいとする。制止の聲をふりはらいつつ，中原さんは，ワルシャワの大會でも，時間が足らないと言つて，自分の發言を阻止した時間不足は，常套的な最もずるい發言封じだと，ワルシャワの讐を大阪で，がなりたてる——そのうち，ちようど3時になる。それをきつかけに，"Jam la tempo venis, do mi cesas." と言つて，けろりとしていられる。これでは憎みたくとも憎めない。

觀光艇「水都」とプラネタリウムとへ，潮のひきさつたあとには，高等試験の受験者と試験官だけが殘る。3 部屋にわかれて，廣間では，三宅が監督して，筆記試驗。はじめたのが定刻をすこしおくれて 3 時 15 分。はじめてから 15 分くらいたつてから，1 人ずつ順につぎの部屋へおくる。そこでは，小坂さんと進藤さんと 2 人で，こもごも，會話の試驗。それがすむと，そのつぎの部屋へまわして，川崎さんの讀み方の試驗。各部屋の連絡は，桑原さんと兒島さんとにお願いした。



普通試驗合格者 49 人のうち，高等試驗を受けたのは 14 人。それぞれ相當できる人たちばかりではあるが，「常識」には，みな，よほどまいつたらしい。普通試驗のときには 1 時間のところを 15 分くらいですませて出て行つた人がたくさんあり，おわりまでかじりついた人はなかつたのが，誰も最後までがんばつている。4 時 50 分。「あと 10 分」とゆうと，みんなうめきごえを出していた。それでも，5 分まえになつて，やつと 2 人が答案を出して出ていつた。あと 2分とゆう，きわどいところで，試驗委員全部と相談のうえ，「15 分間延長します」とゆうと，「ほーッ」と，安堵のためいきの合唱。

午後 6 時から，公會堂地下室食堂で，各分科會。これよりさき，試驗がおわるとすぐ，小坂賞委員の集會，內規の運用，その他について打ちあわせた。わたしは，進藤さん，その他と IEL についての相談をするはずであつたが，進藤さんが，松田周次さんにつかまつて，「大會規約」について頑強に談じこまれて，とうとうお流れになつてしまう。

賣店の荷物を，山岡明一さんが，梅田までチェッキしに行つてくださる。

川崎さん，伊藤さん，檜皮さんと，寳塚へむかう。旅館新鉏の井には，すでに，城戸崎さん，東京の高見さん，笹原さん，鈴木さん，それに山口の出水さん御夫妻が見えている。

12 時ころまでおしゃべりをして，川崎さんとわたしとは，自分たちの部屋へ歸り，床にはいつてからも話しこむ。自分の返事がなま返事になるのを意識しながら，2 時すぎころ寢こんでしまう。河鹿がないている。



30日。

朝，どてらのまゝカメラのまえに顔をそろえる。

今日の會場ホテルへむかう。驛からの道とT字型にぶつかるところで，今朝大阪をたつて來た野原先生以下8-9人のかたたちに，ばつたり出あう。

三石清さんが，「6疊の間に9人もおしこめた」といつて，大阪の合宿に對する憤懣をもらしていた。

ホテルには，もう，すでに來ている人たちもかなりある。

テラスをぶらつく人たち。

パーラーで，ピアノのまえにすわつた川村信一郎さんをとりまいて，エスペラントの歌をかたつぱしから歌う人たち。

それらをカメラにおさめまわる人たち。

10時40分，進藤靜太郎氏司會，伊藤幸一氏書記で，**分科會報告**。

醫學	俣野四郎氏
婦人	多田つや孃
科學	川村信一郎氏
カタカナ	檜皮正純氏
鐵道	寺田治二氏
佛教	伊藤氏代讀
觀光，防共	池川清氏
Filatelistoj	前田健一氏

草苅副會長から，小坂賞委員會委員，進藤氏案大會規約に關する特別委員會委員の顏觸れを發表。

小坂賞委員：——大石和三郎(會長)，淺田一(副會長)，佐々城佑(副會長)，三宅史平(幹事)，桑原利秀(幹事)，長谷川理衞，磯崎巖，由比忠之進，川崎直一，久保貞次郎，中原脩司，岡本好次，進藤靜太郎，月本喜多治，(以上再任)，青木武造(東京)，井川靜(盛岡)，甲斐三郎(臺北)，川原とき(東京)，野村理兵衞(富山縣)，高橋邦太郎(靜岡)，塚田勝(帶廣)，白木欽松(名古屋)，杉田正臣(宮崎)，植田高三(長崎)，八木日出雄(岡山)(以上新任)。

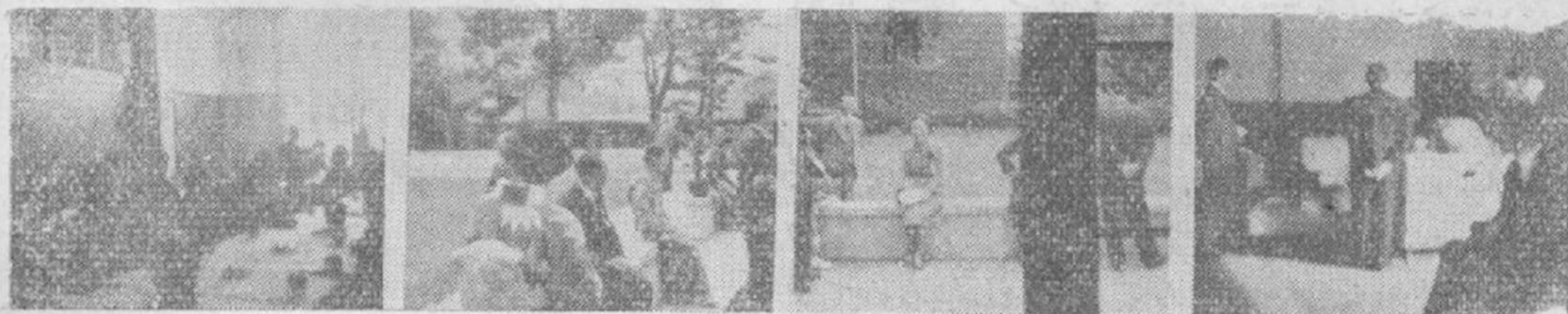
規約委員會：——小坂狷二，宮本新治，竹中治助，大崎和夫，進藤靜太郎。

食事。

草苅孟氏，大阪市商工課長として，大阪市を代表，感謝の辭を述べられる。ついで，觀光事業の意義を說明し，國際的理解と，國際收支決濟上の國策としての觀光事業に對しエスペランティストの協力を期待しられる。

それにひきつゞき，今日はじめて參加された大島廣博士が，おくれた罰として，まづ第1に挨拶させられる。ついで小坂さん，藤間さん。その藤間さんのお話の描いた波紋として，夫妻エスペランティストの代表として出水さん——進藤さんがS-ro Demizuとよび，御本人は，「Izumiである」とゆう訂正で挨拶にかえる——とfraŭlino代表として萬澤さんの挨拶。

最後に，高知の藤田稔三氏。目下御編纂中の語源辭典の原稿をお示しになつて，それについての苦心談をされる。イタリー語とスペイン語との辭書をひくために，高知から，わ



大阪大會協議會で私はなぜ進藤氏案大會規約に賛否を表明しなかつたか

RO 2 月號に進藤氏が發表された大會規約案が 4 月 29 日の大阪大會で審議された。この大會の全出席者は，200 名前後と思われ，そのうち該案を支持された方は 20 數名，反對者は 10 數名に過ぎず，危く該案通過の決定がありそうであつたが，桑原利彥氏の修正動議により，特別委員附托となり，其の決定は明年の宮崎大會迄に持越されることとなつた。

進藤氏案大會規約に就ての私の考え方は既に RO の 3 月號に記した通りで，現在も考え方には當時とは少しも變つては居ない。併し今度の大會協議會では，次に示す 2 の理由に依り賛否を表明することを避けたのである

1. 此の規約は大會出席者のみで決定すべきものではない。

進藤氏案で問題となつて居るものは「地方會並ビ分科會＝關スル大會規約案」であつて其の全文を再錄すれば

大會＝參加スル地方會並ビ＝分科會ハ次ノ條件ヲ具備スベシ：

——10 名以上 Esperantistoj ヲ以テ組織セラルヽ事。

——別＝定メラレタル期限マデ＝會員 1 名＝付キ年額 1 圓ノ割合ヲ以テ大會賦課金ヲ醵出スル事。

以上の如きもので大會に參加する地方會や分科會に或る制限を附することとなり，この規約を實行するものは，その地方會や分科會である。故にこれの制定に參與し審議をなす者は，當面の對象，卽ち地方會や分科會の代表者であるべきで，individua な一般參加者が決定すべきではない。今回の大會で挨拶された地方會や fakaj societoj の數は 10 を出でなかつたように思つて居る。併し我が國全體では大會へ代表こそ送らなかつたが，地方會や fakaj societoj として現存して居るものは此の 3 倍も 4 倍もの數でないかと思う。しかして種々の事情で今年は代表を送らなかつたが，來年は送り得るとゆう會もあり，大阪大會で 1 grupo 1 票の制度で該案を審議したとしても，少數で決定することは爾後の實行が危まれる。

私のように individue に參加した者には grupo を單位とした規約がどんなに制定されようと，少しも痛痒を感じないし，また餘り面倒であるならば參加しなければよいのであるが，地方會や fakaj societoj にとつては公式に此の後大會に參加が出來るか出來なくなるかの別れ目で，實に重大なる問題とも考えられる。それでこうした個人を單位とした大會で議決せず，全國の各地方會や fakaj societoj に諮り定むべきであると思う。

2. 討論に依つて大會に於ける harmonia な氣持を損いたくない。

功名心や意地で角突きをやらなければ出來ないとゆう會合ではないから，紛糾しそうな問題は提出しない方がよいと思つて居る。それで，前夜懇親會で進藤氏が大會規約について何か意見はないかとの質問を私にされたが感情に走つて議論倒れになることもつまらな

ざわざ大阪まで出かけられたとゆうお話には，頭がさがつた。

進藤さんの閉會の辭，そして一同で，“Al la fratoj” の合唱。

あとは少女歌劇へ。小雨が降りはじめる。ホテルから劇場まで，傘のなかへ入れてくださつたのが鶴我盛隆さん。16 年まえ，震災の年の岡山大會ではじめてお逢いした方。そのとき，たしか高師の學生であつたが，そののちになつて幾年かのあいだ，わたしが，かつて，そこの生徒であつた大阪の中學校にお勤めになつていたことは，おなじ學校を卒業した川崎さんから聞いて知つていたが，おあいしたのは 16 年ぶり，はじめてであつた。

（三宅史平）

い話であり，なるべく harmonie kaj pace と願う心から「現在何にも考えて居ません」とお答えした次第である。

以上が大體私の賛否を表明しなかつた理由であるが，出席者 200 名，賛否兩者を合して 40 名，結局殘りの大部分 160 名は私と同様に賛否の意志表示を避けられたわけで，其の場合議長や提案者は何故かくも多數の人が賛否の意志表示をしなかつたかを考える必要があると思う。痛切に其の必要を感じるならば誰でも賛成するだろうし，また切實なる反對意見を持つて居るならば，其の意志表示をするであろうが，そうしなかつたことは大部分が關心を持たないことを意味して居るのではないか。それからかりに本案が可決され，いよいよ實驗される曉を想像して見ると，此の規約を實行し得る地方會や fakaj societoj は恐らく 10 を出でないであらう。提案者が此の案の中に此の際，賴りにならない有象無象の群小地方會や fakaj societoj を整理せしめ篩にかけようと云う意圖が秘められて居るならば，それでよいが，そうでないならば，地方會のみぢめさを暴露せしめるようなものである。この點を私はいたく恐れて居る。我々の大會に規約がないと都合が悪いではあろうが，それを一々規則で固めてしまうとまた動きがとれなくなり，うま味がなくなるのではないかとも思われる。私は進藤氏案は悪いとは決して思つて居ない。たゞ未だ我々の運動は OES の水準には達して居ない。OES のような會が全國に 20 位もあれば文句は全く起らないであろう。結局この案に對して私のいおうとすることは「時期尚早」とゆふのほかありません。(14-5-1)

中西義雄

El antikvaj ĉinaj poemoj

敕勒歌

北齋　斛律金

敕勒川
陰山下
天似穹廬
籠蓋四野
天蒼々
野茫々
風吹草低
見牛羊

KANTO DE ĈIHLEJ

Hu-Lŭiĉin

Pej Ĉi

Jen, Ĉihlej' River',
Sub Jin-ŝan Montar;
La ĉielo kvazaŭ tendo
Tegas super tuta ter';
La ĉielo, blua blu',
La steparo, vasta plu,
Nun blovas vent', sin klinas herboj
kaj montras sin brutar' en ĝu'!

Trad. de **ISOZAKI-Iwao**

第28回招待の使命を帶びて

“出發”不在參加の心算であつたが，明年度大會招待の使命を帶びて出席することになつて，あわたゞしく宮崎を出發したのが27日の午後2時，折よく門司まで出張される同志大坪氏と同車で，文字通り海山の話（氏は漁業に，私は農業に關係している）に時が經つて，午後9時門司に到着。

“幸先良し”おや！と思つた瞬間，緑星章が眼の中にはつきりと映像を結んだ。これはこれは，S-ro Nohara ではありませんか，昨夜は向い合つた寢臺に，それとも知らず同じ Kongreso を夢みて居りましたとは！氏はおもむろに手の朝刊を置いて，ほう，ほう，そうでしたか，これは奇遇でしたな！と言うような譯で，名譽の小坂賞第1回受賞者たる大先輩と共に，大阪入りをすることになつたのは，幸先頗る良いぞと，ほくそ笑む。（28日正午大阪着）。

“提案説明”會長席が一段高いと前に立つた居心地がいゝがと感じ乍ら，ずつと遠くの方の人にはつきり聞えるように心掛けて，原稿を讀み上げる。好意に滿ちた一堂の眼，眼，眼がこちらに集中されて，何とも云えぬ有難い氣持が胸に湧く。約1分間で終る——拍手——採擇。荷が下りた，いや，大きな責任が生じた，さて，大勢出席者があればよいが——複雜な氣持である，然し嬉しい——早速宮崎に電報を打とう，S-ro Sugita, S-ro Suyama k. a. の待ち構えている顔が眼の前に見えるような氣がする。

“宮崎大會”いつ頃開催するか，すぐに多數の方から質問を受ける。春か秋かでしようが，春ならばやはり Aprilo でしよう，未だその程度のお答えしか出來ない。よく研究して見なければならない。しかし，宮崎大會へは是非大勢で出掛け度いから，歸つたら直に募集して，參加旅行費の積立てを初めよう，とゆう名古屋の同志のお話を聞いて，大いに結構と思うと同時に，なるべく早く開催時期を決める方が都合がよいと感じる。

宮崎大會に對する數々の有言，無言の御聲援を聞く。有難い，有難い。これほど好意を持つて戴けるとは——中でも特筆せねばならないのは京都の S-ro Nakahara の Unua Mondonaco だ。Mi elkore dankas lin en la nomo de nia grupo en Miyazaki.

（Apr. 30, 車中にて）

中川勝八

☆

一年生の參加記

突然に感想を，と云はれまして，ただ茫然としておりますが，一學生として幼稚ではありますが，感想の一端を述べさせていたゞきます。前夜懇親會と云い，大會と云い，分科會と云い，第一に感じましたことは解け合つた集い，そしてその中に解かされんとして現れる發表，提案——恰も咲き匂う花壇に何處からともなく蝶蜂が舞い來て，各々の仕事をして，或るものはやがては實を結び次次と子孫を增やし，或るものは生活の糧として蜜を貯え，生命を維持してゆく，とゆうように。——エスペラント運動は毎年の大會を中心として現狀を維持して行かれるところもあり，また，同志を增すために實を結ばれるところもあるでしよう。同志を多く持つてエス語を用いると云うことよりも，その解合つた，融和された精神が必要なのではないでしようか。勿論エスペラントによつて自然と附隨されるのではありますが——しかしエスペラントをやつている人でも何等精神的融和を計つて居られない人も數多いことでしよう。いくら繪筆で繪具をぬつても精神の籠つていない筆にはその繪を繪たらしめることは出來ないのです。心が一筆毎に融和されてこそ一つの繪は光を放つのです。

即ちエスペラントを一般的にするといつて

も，それに籠る精神が一般の人達に歡迎されなければ單なる一部分の發達にとゞまるでしよう。

今大會に於て私は學生の出席の少いのに驚きました。第2の國民が世界を目の前に見るのではないでしようか。すると，そこには世界の日本の立場が控えていることでしよう。それを知らしめるのは云うまでもなくエスペラントなのでしよう。内の融和こそ外の融和に通じるのです。玆に私達は一層の努力をはらわねばなりませぬ。卽ちエスペラントが英語より重大なものとして學生間に用いられんことを望むのであります。

私にとつては解することが難しかつた集いでしたが，ただ打解けた，遠慮のない本當の融和された會でありましたことを心から喜んでおります。同時に自分の未熟なエスペラントに對して益々勵んでゆかねばならぬと覺悟致しました。

平 松 昌 子

☆

高等試驗を受ける

普通試驗にさへ合格の見込の無かつた自分が高等試驗を受けようなどとは思つていなかつたが，受驗の際合格者は高等試驗をも受けるように，との先生のお言葉を正直に受け入れたのと，今を逸しては今後何時その機を得ることが出來るかと思つたのが受驗を決意せしめた動機である。勿論不合格は覺悟の上である。

川崎先生の補習講座を受けさせていたゞき ĵ と ĝ の區別さえよく解らないのには自分乍らにも驚いた。何一つ組織立つた學習をなさなかつた事をつくづく後悔した。捷徑，リングヴァイ・レスポンドイ等々發表された參考書は何一つ讀んでいなかつた。時機が切迫するにつれ讀むべき書物は次々に浮んで來るが豫定の半ばも讀み得なかつた。然し受驗とゆうことの爲にこれまでの學習態度を反省し新たなる意氣と緊張を與えられたことを感謝する。問題では常識の方で最も苦しんだ。豫想の如く遺憾な結果であるが，今後こそは大いにはげむ決心である。

受 驗 生

☆

ポーランドの空

緊張した大會協議會ののち，大阪觀光名所の一つ四ッ橋畔電氣科學館なる星の家――プラネタリウムを訪ねる。見學の星の人約25.大阪市觀光課貴志氏の特別の御案內を煩わす。初めて見る奇異な天象儀に打驚く中，定時刻ともなれば，天象館內は早速來の客に安息を祈るかのような美しい黃昏となる。日沒までの數刻を市觀光課製作の Parolanta Filmo にて座ながら觀光艇水都により，古く新しい浪花の都を一巡見物す。すでに日は大阪灣に沈み靑みをおびた美しい宵空には一番星二番星が次々に現はれ，見る見る中に天空一面目もさめるばかりの星月夜。全く夢の國に遊ぶよう。解說者の巧みな物語りに，おとめ，獅子，大熊等の星座は吾々の魂を何千年前の神話の中に蘇らせる。やがて特に吾々の訪問を祝福するために，宇宙の軸を少しく廻せばこれぞ吾等の父ザメンホフの生れた80年前のポーランドの感激の空。星の人の目は淚に光る。尙數々の挿話，日蝕，太陽の黑點等の物語，やがて眞夜中も過ぎ，曉方の近づくにつれ，あちこちに飛び交う流星。遂に花火のような忙しさ，但し天象館の中では一日は約十四分で經過する，はや東の空も白み流星も消え星の人々も曉の明星に Ĝis revido する。目を開けば再び吾々は工業都市大大阪の中心，輝かしい空の下に立つ。暫く屋上より全市の展望と，大阪の上層空氣を味はつたのち，分科會場にかえる。

隅 谷 信 三

高等試験問題

四月二十九日
大阪市で施行

エス文和譯

1. Ĝi estis tre feliĉa, sed tute ne fiera, ĉar bona koro neniam fariĝas fiera. Ĝi pensis pri tio, kiel ĝi estis mokata kaj persekutata, kaj nun ĝi aŭdis, kiel ĉiuj diras, ke ĝi estas la plej bela el ĉiuj belaj birdoj.

2. Muta kaj malvarma kiel tombo ŝi eniris en la ĉambron, ĵetis nur preterflugantan rigardon sur la knabineton, kiu kunpremiĝinte sidis antaŭ la kameno, ne ekparolis al ŝi, deprenis de la kapo la tukon kaj aliris al la litaĵo, kuŝanta sur la planko.

作　文

次の日本語を Esperanto で云い表わしなさい。

1) 彼がその事を尋ねたら何と返事をしよう。
2) 早速御返事を賜わり有り難う存じました。
3) 天は澄み渡つて一抹の雲もなし。
4) 當講習會の指導者花田先生を御紹介申します。

文　法

1. 次の文中冠詞の用法に誤あらば正せ。且つその理由を記せ。

a. Suno brilas super ni.
b. Akvo en tiu ĉi poto estas malvarma.
c. Jen estas pomo, kiun mi trovis.
ĉ. Lastan jaron la ambaŭ knabinoj mortis.
d. Sur fenestro kuŝas krajono.
e. Li estas plej diligenta studento en nia kolegio.
f. Mi jam trovis mian ĉapelon; nun vi serĉu la vian.
g. Hodiaŭ estas dudeka tago de la marto.
ĝ. Tiuj ĉi birdoj soifas. Donu al birdoj akvon.
h. Li batis min sur kapon. (私の頭を打つた)

2. 次の文に誤あらば正せ。且つその理由を記せ。

a. Ni iru al Tokion.
b. Li havas multe da librojn.
c. Hodiaŭ mi iris al la lernejo sen manĝi.
ĉ. Li ne jam ploras. (最早や泣かぬ)

注意：一文法家によつて誤とせざるものもザメンホフの考えと異る場合はこれを正すこと。

常　識

ザメンホフが Esperanto に譯した世界のいろいろの文學で單行本になつているものを 10 冊以上その原著者と表題をあげてください。

注意：一原著者は原語でも Esperanto 流の綴りでもどちらでもよいが，表題はかならず Esperanto 名を書いてください。

會　話

1) Diru al mi koncize, Sinjoro, antaŭ kiom da jaroj vi komencis lerni Esperanton; ĉu vi partoprenis en kurso aŭ memlernis?

2) Kiun libron vi uzis tiam? (Diru

al mi la nomon de la libro.)

3) Ĉu vi legas Esperantajn gazetojn nejapanajn?

4) Kiom da korespondantoj vi nun havas en kiuj landoj?

5) Kiamaniere vi instruos la interparoladon en la kurso?

6) Respondu al mi, kial oni ekzercas la interparoladon en la kurso.

7) Ĉu vi ne trovas ion kritikindan en tiu ĉi ekzameno de instruista kapableco?

8) Mi opinias, ke la ekzameno estas nur formalaĵo. (La ekzameno ne povas kontroli ĉiujn necesajn erojn de la kapableco; sekve oni ne povas garantii, ke la sukcesintoj en la ekzameno, ĉiuj senescepte, taŭgas por kursgvidado en ĝiaj ĉiuj detaloj.) Diru al mi en kiaj direktoj vi uzos vian energion por atingi la veran indecon de la perfekta kursgvidanto.

讀 み 方

Estimataj sinjorinoj kaj sinjoroj!

Mi salutas vin, karaj samideanoj, fratoj kaj fratinoj en la granda tutmonda homa familio, kiuj kunvenis el landoj proksimaj kaj malproksimaj, el la plej diversaj regnoj de la mondo, por frate premi al si reciproke la manojn pro la nomo de granda ideo, kiu ĉiujn nin ligas. Mi salutas vin ankaŭ, glora lando Francujo kaj bela urbo Bulonjo-sur-Maro, kiuj bonvole oferis gastamon al nia kongreso. Mi esprimas ankaŭ koran dankon al tiuj personoj kaj institucioj en Parizo, kiuj ĉe mia trapaso tra tiu ĉi glora urbo esprimis sub mia adreso sian favoron por la afero Esperanto, nome al s-ro la ministro de la Publika Instruado, al la Urbestraro de Parizo, al la Franca Ligo de Instruado kaj al multaj diversaj sciencaj eminentuloj.

〔公告〕

高等學力無試驗檢定

合格者氏名發表

下記の諸氏は，學力檢定規約附則第１項により高等學力認定證の附與を申請されましたので，試驗委員會で詮衡の結果，これを適當と認め附與することにいたしました。

昭和14年5月1日

財團法人日本エスペラント學會

理事長　大石和三郎

13. 川村清治郎（名古屋・銀行員），14. 田中覺太郎（奉天・滿鐵），15. 植田半次（大牟田・病院長），16. 荒木遜（大牟田），17. 三石五六（東京・學會理事），18. 井澤萬里（小倉・高女校長），19. 大島廣（福岡・九大敎授・理學博士），20. 野見山丹次（福岡），21. 須々木要（北米合衆國オレンヂ市・會社員），22. 大崎和夫（東京・會社員），23. 柳田英二（青森縣・銀行員），24. 橘健二（和歌山縣）。

Ĉambro por virinoj

Kion faras la japanaj esperantistinoj

Maki MANZAWA

"Kion faras japanaj virinoj en la esperanto-movado en Japanujo?" demandis nin hungara samideano kun multaj aliaj demandoj, kiel vi jam vidis en la antaŭlasta numero. Sed ne estas li sola, kiu nin demandis pri tio. La saman demandon ni ricevis de multaj alilandaj samideanoj, kaj ofte ankaŭ de japanaj. Tiu fakto instigis min utiligi ĉi tiun okazon kaj skribi iom pri ni mem. Mi skribos ĉi tie koncize kion ni faris kaj nun faras, ĉar mi kredas, ke niaj agoj devas esti pli vaste konataj kaj multmaniere kritikataj de ĉiuj geesperantistoj en- kaj eksterlandaj por ke niaj paŝetoj sur nia propra vojo estu pli firmaj.

Ni japanaj esperantistinoj havas nian propran organizon, Ligon de Esperantistinoj Japanaj, kiu devus esti unika ekzisto en la mondo en multaj sencoj. Kredeble eŭropanoj mirus kaj ne povus kompreni kial virinoj solaj tiamaniere grupiĝas. Sed en nia lando tio ne estas miriga. Ĉar la socia stato ne estas favora al virinoj por ion lerni miksiĝante kune kun viroj, ankaŭ nia lernado de esperanto estas tre malfacila, precipe en provincaj urboj kaj vilaĝoj. Kaj tio kondukis nin al la konvinko, ke esperantistinoj devas havi ian ligilon por ke ni forte manpremu kaj donadu reciproke aŭ instigojn por venki la malfacilaĵojn sur la lernado aŭ helpojn por atingi niajn kapablojn por bone plenumi niajn rolojn en la esperanto-movado. De tia varma deziro de tutjapanaj esperantistinoj nia ligo naskiĝis en junio 1936. Dank' al energiaj klopodoj de samideaninoj kaj afablaj helpoj de samideanoj ĝi havis sanan kreskadon depost sia naskiĝo kaj marŝas ĉiam antaŭen sub la moto "unu laboron en unu jaro." Ĉar la membrinoj de la ligo estas ankoraŭ malmultaj (ne pli ol cent), ĝia forto ne estas sufiĉa por entrepreni multajn aferojn aŭ grandajn laborojn, kaj tial ĝi entreprenas por unu jaro nur unu aferon kaj ĝin plenumas plej konscience per sia tuta forto.

En la unua jaro de la naskiĝo, en 1936, ni okazigis esperantan kurson por virinoj en Tokio, kiun partoprenis dekkelkaj laborantaj virinoj kaj kiu finiĝis kun bona rezultato.

La dua jaro 1937 estas neforgesebla jaro por ni, ĉar ni plenumis kun brila sukceso tre grandiozan entreprenon, nome Verdigon de la tutjapanaj bibliotekoj. Ĉar tro malmulte da bibliotekoj en nia lando havas esperantajn librojn, ni deziris verdigi ĉiujn bibliotekojn en nia lando donacante al ili esperantajn librojn. Kaj por tio ni komencis grandskalan monkolekton. En tri monatoj ni kolektis 588 enojn kaj duonon el 244 geesperantistinoj kaj 103 neesperantistaj simpatiantoj. Per la kontribuita mono ni plenumis du aferojn. Unu estas "enketo pri la esperantaj libroj en bibliotekoj de la tuta lando." Ni demandis al 856 bibliotekoj, kiujn esperantajn librojn ili havas kaj kiom da fojoj oni utiligis la librojn. Ni ricevis respondojn de 449 bibliotekoj kaj el ili ni faris interesan statistikon. La alia estas "librodonacado." Ni donacis librojn eldonitajn de JEI kaj aliaj al 943 bibliotekoj ŝtataj, urbaj, vilaĝaj, kolegiaj kaj privataj. De la eklaboro ĝis la fino ni bezonis plene naŭ monatojn.

En la tria jaro, en 1938, nia laboro estis traduko de verko pri japana kutimo kaj moro. Por tiu celo ni elektis kiel tekston "Children's Days in Japan" el Tourist Library de Kokusai Kankokyoku. La tradukadon partoprenis 23 membroj el la tuta lando kaj la tradukado finiĝis en la lasta aŭtuno. Baldaŭ ĝi aperos antaŭ vi en bela formo kun belaj ilustraĵoj.

Nia laboro por tiu ĉi jaro estas redaktado de "Ĉambro por virinoj" sur la gazeto "La Revuo Orienta." Per tio ni celas, ke ni elmontru malkaŝe kaj senafekte niajn opiniojn kaj sciojn, eĉ se ili estas malaltaj.

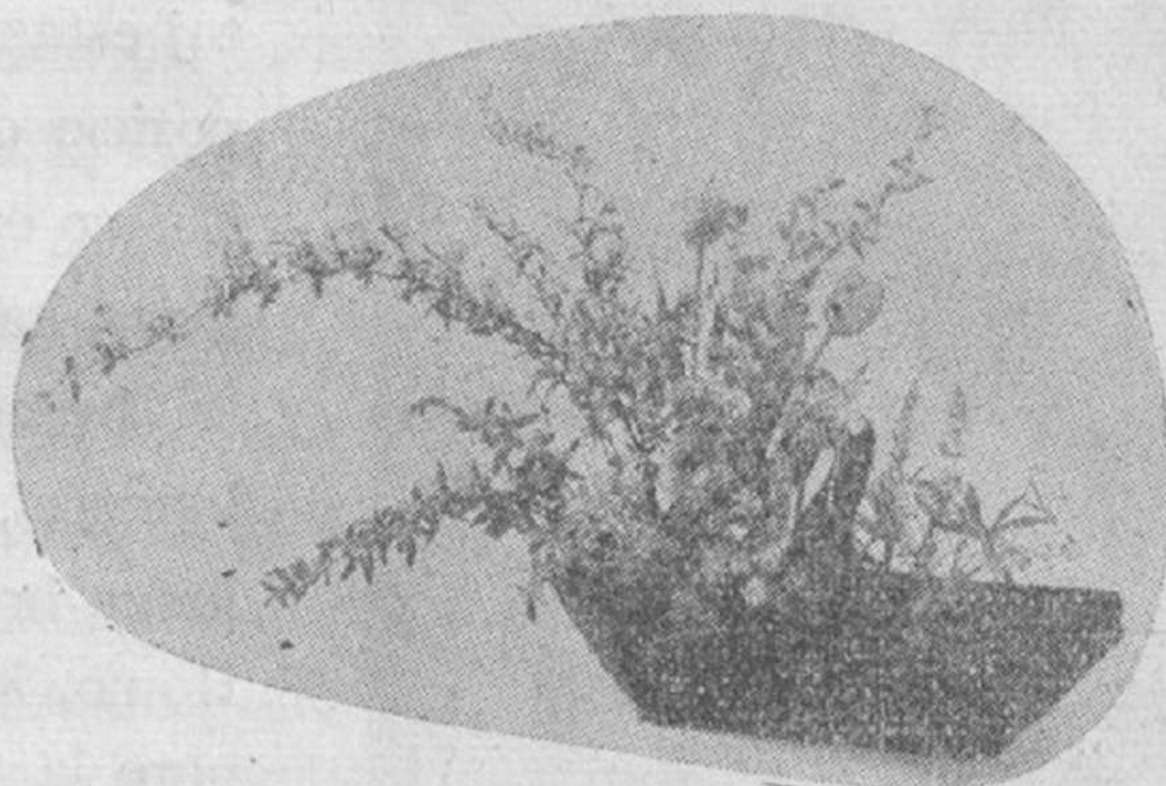
Nia ligo estas ankoraŭ juna kaj la plejparto de la membroj estas nur komencantoj, tamen ni studas ĉiam fervore kaj laboras per la tuta forto. Ni estus tre dankaj, se vi, samideanoj kaj samideaninoj, bonvolus doni al ni sugestojn kaj instigojn.



Notoj pri Floraranĝo

III

Yukiko ISOBE



Moribana sub la influo de Nageire. *KBS-foto*

Depost la meza parto de Tokugawa periodo la arto floraranĝo, antaŭe provizita plejparte en la altranga klaso, rimarkinde dissemiĝis inter komercista klaso,

kaj fine fariĝis necesa akiraĵo de la ĉiutaga vivo de ĝenerala publiko. Ĝis la Meizi Renovigo florarto disvastiĝis tiel larĝe, ke oni tre malofte trovis familiojn, en kiuj ne estis eĉ unu persono lerta en tiu arto. Kaj ankaŭ estas atentinde, ke la arto, kiu estis iam ĉefe nutrita de la manoj de sinjoroj, komencis esti studata de multaj virinoj.

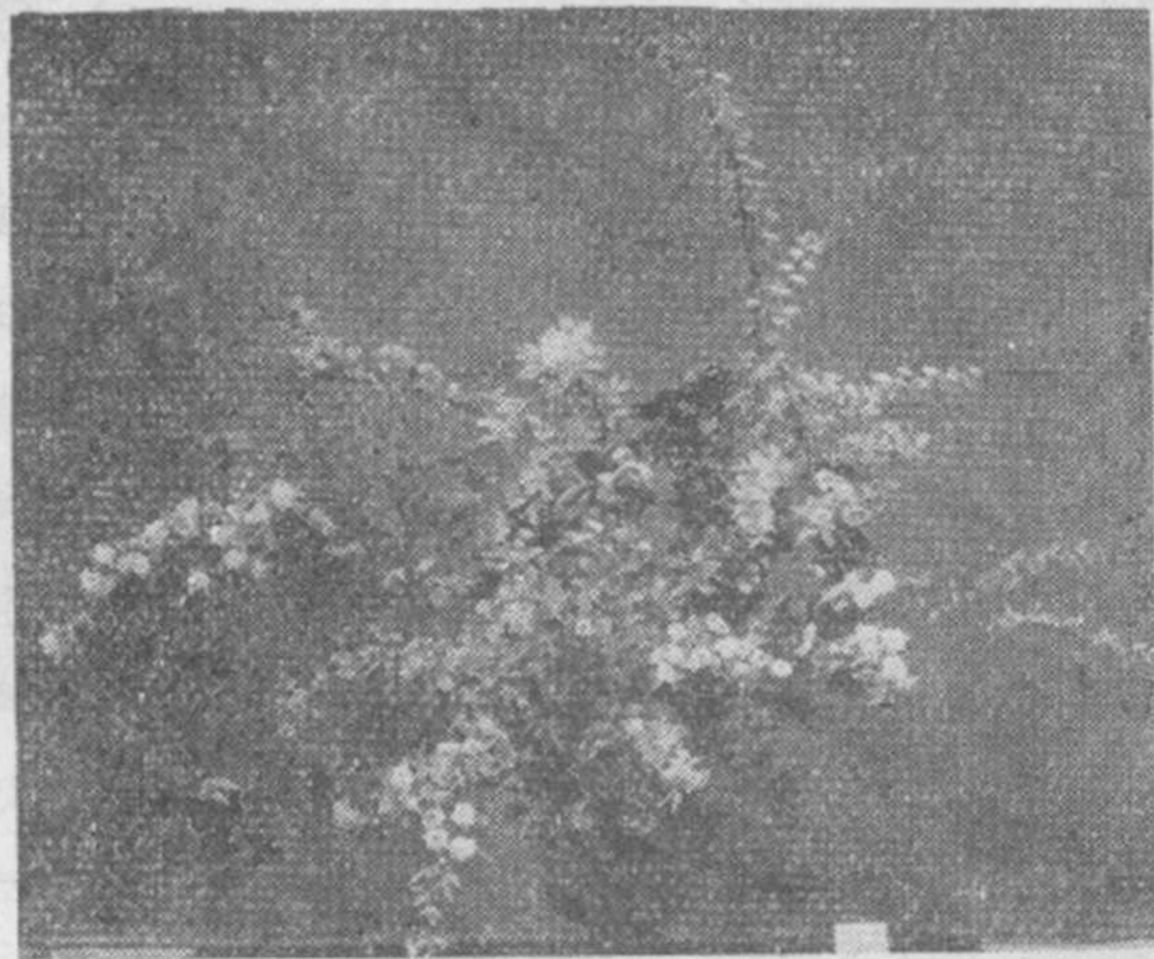
Kun tia dissemiĝo de la floraranĝo inter la publiko la nombro de la skoloj plimultiĝis preskaŭ senkalkuleble, kvankam jam en la komenco branĉiĝis multaj skoloj el la plej malnova ortodoksa *Ikenobō*-skolo. Ĉi tie mi nomu nur kelkajn reprezentajn, kiuj estis influoplenaj en la kampo de florarto tra Tokugawa periodo ĝis la nuna tempo. Oni certe ne malkonsentus, ke mi mencias unue la nomon, *Ikenobō*, kiel plej pioniran kaj popularan skolon: de tiu, speciale en la frua periodo, multe dependis la progreso de la klasikaj florkompozicioj, Rikka kaj Seika. Krome mencindaj estas Sōamiryū, Kōryū, Misyōryū, Bisyōryū, Syōgeturyū, kaj aliaj.

Kompreneble ekzistas iom da diferenco inter respektivaj skoloj, kiel ekzemple Ensyūryū karakterizas sin en tre emfazema kaj ekstrema modifado de originalaj formoj de plantoj; tamen inter ĉiuj skoloj troviĝas esenca akordo sur la fundamenta teorio. Nome en ordinara *Seika* formo estas tri elementaj branĉoj, kiuj estas ĝenerale konataj per la nomoj de tri gravaj potencoj de Naturo—Ĉielo, Tero kaj Homo. Tiuj ĉi terminoj varias laŭ skoloj kaj instruistoj, sed la tri elementoj estas nepre necesaj en *Seika* florkompozicio de ĉiuj skoloj kaj aranĝmaniero, kiu ne entenas ilin, estas konsiderata sengusta kaj tre mallerta. Supozu, ke estas tri branĉoj de ĉerizarbo kun malsamaj longecoj, kiujn oni volas aranĝi. La plej longa branĉo estas nomata Ĉielo, la meza Homo, kaj la plej mallonga Tero. Ordinare la Ĉielo-branĉo estas metata en la m zo de la florvazo, la Homo-branĉo en alia flanko, kaj la Tero-branĉo antaŭ la



Seika en la stilo de Ensyūryū
KBS-foto

Ĉielo-branĉo. Se ni desegnas linion pasantan la pinton de ĉiu branĉo, skalena figuro estas formita.

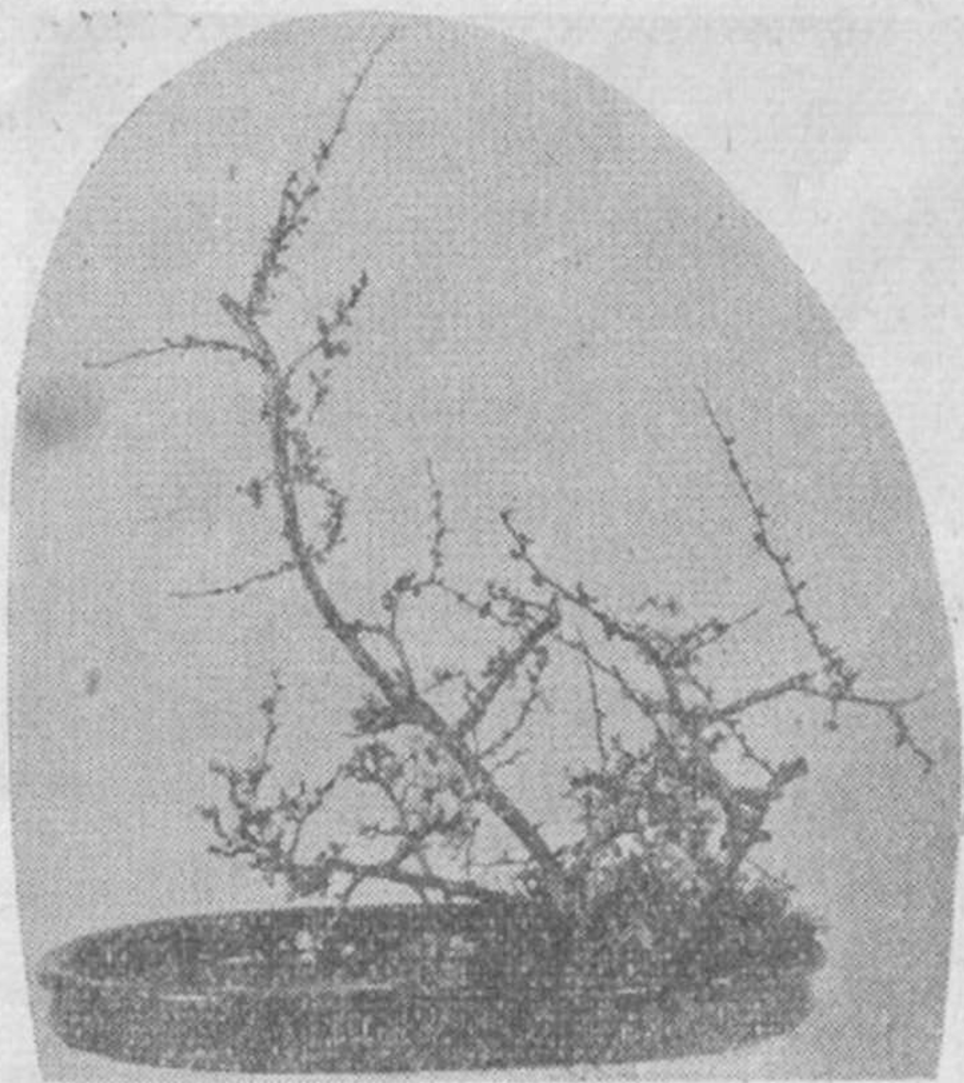


Moribana sub la influo de Rikka.
KBS-foto

Aliflanke remodifado en *Nageire* estis prenata en la fino de la 18a jarcento. Ĝi estas konata kiel *Bunzin-ike*, kaj distingas sin el la malnova *Nageire* en multaj aspektoj. La nomo Bunzin-ike devenis el la fakto, ke ĝi estis elpensita de la pentristoj de *Bunzin* skolo, kiu estis tre populara de Bunka, Bunsei eraoj sub la influo de ĉinaj pentraĵoj. La majstroj de tiu ĉi skolo, ekzemple, Yosa Buson, Tani Buntyō, Tanomura Tikuden, multe interesiĝis ĝui la novan manieron de tetrinkado, *Sentya*, kiu plimulte similas al ĉina maniero de tetrinkado ol la propra japana teceremonio definita de Syukō, Rikyū kaj aliaj eminentuloj. Tiu nova maniero de tetrinkado profunde influis la ĝistiaman stiion de Nageire, kaj rezulte aperis la nova florkompozicio prenanta la nomon el Bunzin-skolo. Kompare kun aliaj formoj de floraranĝo, ĝi estas tute libera el la tradiciaj reguloj kaj la karakteriza naturo de la aranĝotaj plantoj estas zorge esprimataj laŭeble sen artifika tuŝo.

Inter la supre menciitaj pentristoj de *Bunzin* skolo, la plej fama kaj kontribuinta al la remodifado de *Nageire* estis Tanomura Tikuden, kiu postlasis al ni tre valoran verkon pri la temo. Sed en lia tempo reale komprenis la estetikan valoron de la nova *Nageire*, ne multaj homoj, eble nur la personoj, kiuj asociis kun *Sentya* maniero de tetrinkado. Tamen en la Meizi erao, la nova *Nageire* ekaltiris multe da atento de la ĝenerala publiko kune kun la *Moribana* tipo, pri kiu mi skizos ĉi-sube.

Moribana naskiĝis en la Meizi erao, kiam kun la enkonduko de okcidentaj modoj de civilizacio Japanujo ricevis grandan ŝanĝon en multaj rilatoj. Plimultiĝo de domoj konstruitaj sub la influo de la eŭropa arkitekturo urĝe postulis krei novajn aranĝmanierojn de floroj por taŭgi al la novaj stiloj de domoj. *Moribana* estis la respondo al tiu postulo kaj grade ekhavis popularecon tra la lando.



Moribana sub la influo de Seika.
KBS-foto

En *Moribana* ĝenerale floroj estas araĝataj en malprofundaj bazenoj kun larĝa buŝo; kaj du diferencaj tipoj estas troveblaj, nome, la unua celas prezenti pejzaĝon—ebenaĵon, arbaron, riverbordon, parton de ĝardeno, ktp., kaj la alia akcentas esprimi la belecon de floraranĝo bazita sur la harmonio de koloro kaj pozicio de floroj. Unuvorte *Moribana* ne konformas al la ekzaktaj tipoj de la tradiciaj kompozicioj, sed adaptas la figuron de skaleno por nivelo en la modelo de ilustraĵo, same kiel ĝi estis praktikita en *Seika* formo. Plue ne nur de *Seika* formo, sed de aliaj du gravaj stiloj, *Rikka* kaj *Nageire*, ĝi ricevis influon kaj sugeston en ĝia florkompozicio.

La lastajn du-tri dek jarojn *Moribana* kaj *Nageire* kune prosperis pro la ondoj de eŭropaniĝo de nia socia vivo, al kiu ambaŭ estas pli konvenaj kaj adapteblaj ol formalisma tipo, *Seika*. Tial ekmontriĝis iom da malfortiĝo de la influo de *Seika* malgraŭ la longa plenflorado tra Tokugawa periodo. Sed baldaŭ ĝi regajnis la popularecon, kaj tiuj ĉi tri stiloj estas nun konsiderataj reprezentaj grupoj de floraranĝo.

Antaŭe kiam mi ne atentis multe pri la historia disvolviĝo de la floraranĝo, mi opiniis, ke ĝi estas nur tradicia arto de la japanoj, kies formo estis jam fiksita antaŭ jarcentoj. Sed trarigardante la historion skize, mi miris ĝian fleksseblecon kaj adapteblecon al la sociaj ŝanĝoj. Tute malsame de aliaj japanaj artoj parencaj—teceremonio, kaj *No*-dramo, kiuj ricevis tre malmulte da ŝanĝo depost kiam iliaj formoj estis determinataj ĉirkaŭ kelkcent jaroj antaŭe, la florarto sola lasis sin al multaj ŝanĝoplenaj sortoj en la historio, pruvante, ke la arto estas neniam kristaligita. Ĉar feliĉe aŭ malfeliĉe, floraranĝo ne havas tian fiksitan lokon difini la formojn, kiajn *No*-dramo kaj teceremonio havas: por la *No*-dramo estas speciala scenejo por prezentado, kaj por la teceremonio malgranda ĉambro por gustumi la estetikan signifon. En la arto floraranĝo floroj kaj florvazoj havas neapartigeblan rilaton; modo de florvazoj kaj grava

ŝanĝo de domkonstruo duoble influas la florkompozicion, kaj kondukas senescepte aldoni elvolviĝon al la malnovaj, kiel la historio mem parolas.

Ĉiuokaze la arto floraranĝo en nia lando estas, ŝajnas al mi, pli populara hodiaŭ ol antaŭe. Preskaŭ ĉiuj junulinoj kutime studas ĝin same kiel junulinoj en okcidentaj landoj praktikas muzikon kaj pentradon. Cetere lasttempe la arto komencis tiri grandan intereson de fremdlandanoj, precipe de tiuj en Usono, Francujo, Holando, Siamo, Filipinoj, kaj mi aŭdis, ke ili sincere akceptas kaj ŝatas floraranĝon kiel la belan donacaĵon de la malproksima Japanujo.

(*La fino*)

S-ro H. Kurachi vizitos Usonon



S-ro Inĝ. H. Kurachi, unu el la plej konataj samideanoj en nia lando, vizitos Usonon laŭ la ordono de sia kompanio.

S-ro Kurachi ekveturos en la 11-a de majo per NYK-ŝipo Tatuta Maru el Yokohama, kaj post du semajnoj alvenos la havenon de San Francisco, de kie li rekte iros al Novjorko, kien li atingos en la 30-a. Proksimume tri monatojn, nome de 2. junio ĝis 3. aŭg., kaj denove de 24. aŭg. ĝis 28. sept., li restos en Pittsburg. Kaj intertempe li vizitos jenajn urbojn:

Chicago, Novjorko, Detroit, Buffalo, Philadelphia, Erie, Milwankee, Los Angeles, Seattle, ktp.

Ni estus tre ĝojaj se la usonaj samideanoj bonvolus akcepti lin tiel varmkore, kiel ili jam montris en la lastaj jaroj sian gastamemon, kiam ilian landon vizitis niaj membroj, nome f-ino Isobe, s-ro Kubo, s-ro Sioyama, s-ro Ikegawa, ktp.

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

ĈEVALO

—El " La Tero kaj Soldatoj "—

HINO-YOSIHEI

Parolante pri la korpo, ĝia stato estas ne tre vigla, ĉar ni faras nenion krom manĝi kaj dormi. De tempo al tempo ni iras al la ferdeko, laŭ iniciato de serĝento Yamasita, kaj ekzercas nin per " Kenkoku "-gimnastiko aŭ similaj, sed tio ne multe utilas por nin refreŝigi. Tamen pli kompatindaj ol ni soldatoj estas ĉevaloj. En la malvasta, malluma ĉevalejo preparita en la plej malsupra ŝipkelo, la militĉevaloj restas ligitaj senmove jam de dekkelkaj tagoj.

De tempo al tempo mi rigardas de la supra ferdeko en la profundan malsupron, kaj tiam al mi ŝajnas, ke la dikeco de la trunko de la ĉevaloj vicigitaj en la malluma kelo pli malgrandiĝas rimarkeble tago post tago. Plimultiĝas eĉ tiaj ĉevaloj, kies riboj reliefiĝis. La provizo de la furaĝo kaj la akvo estas sufiĉa. Precipe la akvon oni donas al la ĉevaloj sufiĉe, eĉ ŝparante al la soldatoj. Koncerne la akvon, ni soldatoj troviĝas en stato pli malsuperaj kaj kompatindaj ol la ĉevaloj. Ni preskaŭ ne havas okazon nin bani, kaj ofte ni restas ne lavinta eĉ la vizaĝon. En tiu punkto la ĉevaloj estas metitaj en tre bonaj kondiĉoj, sed verŝajne pro malsufiĉa ekzerciĝo, absoluta manko de la sunradioj, kaj la malpura aero en la ŝipfundo, ili malfortiĝas tago post tago. Mi vidis jam kelke da ĉevaloj, fine falintaj. Malgraŭ, ke la soldatoj penas resanigi ilin per sia tuta povo, sed la ĉevaloj restas kuŝantaj, kaj finfine spiras sian lastan spiron. La soldatoj rigardas ilin fikse, kiel se ili flegus la lastan momenton de sia propra infano. Mi jam plurfoje vidis dum ni rigardis de la supra ferdeko malsupren en la profundan kelon, ke trajnanoj sidas por kelka tempo apud sia formortinta ĉevalo kaj baldaŭ stariĝas kaj kompleze salutas ĝin. La mortintaj ĉevaloj estas levataj supren el la kelo per levrado, kaj per ŝipeto forportataj al la insulo. Ŝipisto de la insulo forveturas manipulante la fiŝboaton apenaŭ ne subakvigita per la plenplena ŝarĝo de la kadavroj de la ĉevaloj. Pro la morto de kelkaj ĉevaloj fine iun tagon ĉiuj ĉevaloj estis portitaj sur la insulon.

Kiam mi vidas militĉevalojn en tia stato, tiam tuj prezentiĝas en mia memoro sceno de Yosida-Uhei loĝanta ĉe la monto. Kiel Uhei fartas, mi nun pensas, kaj kiel lia ĉevalo. Uhei, estante laborema ĉaristo, tre amis sian

ĉevalon. Kiam la konflikto eksplodis, baldaŭ lia ĉevalo estis rekviziita. Kvankam li jam estas kvardek jaraĝa, li tamen ankoraŭ ne havas infanon, kaj li multe klopodis por adopti infanon, en kio li malsukcesis, kaj fine tion rezignis. Li tiam nomis la ĉevalon Kitizō kaj amis ĝin, kiel oni prizorgas sian infanon. Mi rememoras, kiel ofte li plena de bonanima rideto ripetis, kvazaŭ li scius nenion ol diri tion, "Kvankam tia granda estaĵo, kiu ne povas esti enmetita en la okulon, tamen Kitizō estas tiel aminda por mi ke mi ne sentus doloron, eĉ se mi enmetus lin en mian okulon." Kiam estis decidite, ke tiu Kitizō iros al la batalkampo, li iris al la urbo por mendi flagrubandon. Li starigis antaŭ sia domo ĝin, sur kiu oni legis, "GRATULON POR LA MILITIRO DE KITIZŌ." Lia edzino, kiu estas nomata, se mia memoro ne eraras, Osin faris laŭ lia ordono, "senninbari" el granda tuko. Kompreneble tio estis tiel granda, ke ĝi povus envolvi kvar-kvin homojn. Lia edzino aperis ĉiutage en la urbo, kaj petis al la preterpasantoj alkudri nodojn. Por ĝi ŝi uzis pinglon por *tatamimato*, kaj la virinoj petataj vidis tion komikaj, kaj kelkaj eĉ pensis tion serĉo, kaj sekve ŝi devis, oni diras, pagi grandan penon ĝis la kompletiĝo. Kitizō estis volvita en ĝi ĉe la ventro. Kaj krome Uhei petis de la sanktejoj, Sirayama, Miyazidake, ktp, multajn amuletojn por la batalkampa bonŝanco, kiujn li enkudrigis en la *senninbari*-zonon por ke Kitizō portu ĝin. Li invitis najbarojn, por fari modestan festenon. Ĉar ankaŭ mi estis invitita, mi vizitis lin kunportante unu syō-botelon da sakeo por gratulo kaj tie mi vidis, ke el la kvin-ses gastoj, la granda parto estis laŭŝajne liaj samprofesiuloj. "Ĉar mia kara Kitizō havas tian fortikan korpon, kaj plie li estas tre obeema, certe li estos tre utila al la armeo kaj havos belan meriton. Estas do tre gratulinde. Nu, trinku por lia sano, trinku." Dirante tion, li verŝis gutojn da larmoj. Kitizō eltirita antaŭ la verandon estis enŝovinta sian longan vizaĝon en tiun ĉi festenon. Al Kitizō, kiu aspektis iom mirigita, Uhei aŭ enŝovis en ĝian buŝon boligitan kankron, sekigitan sepion, kaj tiel plu, aŭ enverŝis sakeon. En la sekvanta vespero mi hazarde renkontis ĉe Byōin-zaka Uhei, kiu estis sur la revenvojo de la ĉevaltenejo de la regimento, kie li transdonis Kitizō en la mateno. Kun mieno iel senkuraĝigita, li diris nur, "Kitizō estis aminda estaĵo", kaj foriris rapidpaŝe. De tiam mi ne vidis lin, tamen, mi aŭdis per diversaj onidiroj, ke la tago estis varmega, kaj Uhei akompanis Kitizō al la ĉevaltenejo alte tenante la flagrubandon. Al Kitizō ornamita kiel sankta ĉevalo per la *senninbari*, amuletoj kaj standardo de la leviĝanta suno, Uhei

---

Senninbari:—talismana zono por militiranta soldato el tuko kun mil kudronodoj faritaj de mil apartaj virinoj.

vestis per pajla ĉapelo, al kiu li faris truojn por la oreloj, kaj la kondukrimenon prenis lia edzino. En la ĉevaltenejo estis multaj ĉevaloj kolektitaj el diversaj lokoj. Estis ankaŭ aliaj ĉevaloj, kiuj estis, same kiel Kitizō, ornamitaj per *senninbari* aŭ per la suna standardo. Ankaŭ kiam Uhei liveris la ĉevalon al la regimento, li verŝis larmogutojn kaj frotis la belan kolhararon, frapadis la nukon, kaj karesis la gluteon, kaj ne volis forlasi la lokon ĝis fine vesperiĝis. Deposte, Uhei vizitis ĉiutage la tenejon sufiĉe malproksiman, spite la varmegon. Kiam li estis hejme, li estis malvigla kvazaŭ li fariĝus stulta, sed kiam li vidis sian amatan ĉevalon, li subite fariĝis vigla kaj viveca, kaj, kiel lia kolego diris parolante pri li, "Uhei fariĝis kiel planto perverŝita per akvo," tiel vigliĝinte, li pri zorgis la ĉevalon, enmiksite inter la soldatoj de la regimento, ion murmurante kvazaŭ li ion parolus al la ĉevalo. Ankaŭ tiam, li verŝajne rimarkis, ke Kitizō, ve, jam ne apartenas al li, li verŝas larmojn kiel infanoj, pro kio li estis ridata de la soldatoj. La soldatoj kuraĝigis lin, dirante: "De nun Kitizō apartenas al la ŝtato, do li pli prosperas, kaj krome ni ameme prizorgos lin." Kaj tiam Uhei diris: "Mi antaŭdankas vin, mi antaŭdankas vin", kaj nur ripetadis saluti. En la tago, kiam fine Kitizō estis transmetata en la ŝipon kaj ekveturis el la haveno, li staris sur la marponto kaj kriis el sia tuta gorĝo la nomon de sia amata ĉevalo, kaj ĝis la ŝipo forlasis el lia vidkampo, li svingadis la flagon tiel, ke ĝi apenaŭ ne disŝiriĝis. Tiel mi aŭdis. Kiun batalfronton Kitizō poste iris, mi ne estas informita. Kiam mi ekiris militon, Uhei venis al mi, kaj prizorgis min pri diversaj aferoj. En la tago, kiam mi enŝipiĝis, Uhei diris al mi sur la marponto: "Kitizō havas sur sia gluteo brulstampitajn markojn de rondo ĉirkaŭ kruco kaj, apud ĝi, litero "Kiti." Oni do povas tuj rekoni ĝin. Krome vi konas la ĉevalon, la kaŝtan- kaj ruĝkoloran. Se vi renkontos lin, tiam bonvole transdonu mian saluton. Jes, strange estus transdoni saluton al ĉevalo. Do volu almenaŭ doni frapon ĉe la nazpinto, kaj, se vi havas tempon kaj bonvolus doni al mi informon, mi estus tre dankemaj por via bonkoreco." Iam mi demandis al soldato, kiu prizorgas la ĉevalojn, ĉu li ne trovis tian ĉevalon, sed li respondis, ke li ne rimarkis. Oni nomus min indiferentulo, sed, ĉar estas iom tede esplori ĉiujn ĉevalojn unu post la alia, mi ankoraŭ ne plenumas tion. Mi ne vidas la ĉevalon samvice kun la homoj, sed en iu signifo, mi ne povas rigardi la ĉevalojn tute aparte de la homoj.

Trad. de MAEDA-Norijasu

小坂狷二

前置詞略解 42

XXVI JE (其二)

2.【Je の用法】 元來一定の意義を有しない融通前置詞 je に一定の用法はない筈であるが，永年一般の使用によつて習慣的に je が屡々用いられる場合が自然と生じて來ている。

初心者の作文ではあるまいし，普通しやべつたり，物を書いたりする場合『どの前置詞を用いてよいか迷う』など云う悠長な事はあり得ない。他の前置詞も然りであるが，すらすら書き，しやべる際には je もその人の習慣でいつも使用する所へ自然ととび出して來べきものである。

(A) 『時刻の區別』。

Li mortis *en* la **jaro** mil naŭcent dua. 1902 年に死んだ。
Li mortis la dua*n* (**tagon**) de Majo. 五月二日に死んだ。
Li mortis *je* la dua (**horo**) kaj kvarono posttagmeze. 午後二時十五分に死んだ。

一般に『時間』は en,『時刻』(時の一點) は ĉe で示されるが，<u>區別のため</u>『何月何日に』と云う事件の起つた『日附』を示すのには前置詞省略の目的格,『何時何分に』と云う『(時計の) 時刻』は je を用いることが習慣となつて居る (そのため tagon や, horo を略してもわかる)。

〔比較〕 en la mateno 朝の中に, en Majo 五月には, en la venonta dimanĉo 次の日曜日に, ĉe la sunleviĝo 日出に際し, ĉe la tagmezo 正午に。

(B) Per に對する自他の區別。

Mi kaptis lin **per** la mano (＝per *mia* mano). 手で彼をつかまえた。
Mi kaptis lin **je** la mano (per *lia* mano). 彼の手をとらえて彼をつかまえた。

この用法は Zamenhof 博士が習慣的に屡々用ひ，他の人で之に倣う者も多い。

Subite ŝi ekkaptis **per** ambaŭ (＝per ambaŭ *siaj*) manoj du belajn florojn ĉe sia flanko. (Fabeloj, III, 4) 不意に傍にあつた花を兩手で摑んだ。
Poste ŝi prenis Gerdan **je** la (＝per *ŝia*) mano, iris kun ŝi en la malgrandan dometon. (Fabeloj II, 57) それから彼女はゲルダの手をとつて一緒に小さい小屋に入つて行つた。

之に倣つて mano 以外のものにも je を應用した例がある：

Ŝi eksentis, ke oni **tenis** ŝin **je** la (＝ŝia) brako. (Marta, 181) 腕をとらえて引き留める人があるのを感じた。

〔註〕 **sub** la brako としてもよい。

La homo **kaptis** ŝin **je** la (＝ŝia) rando de la tuko. (Marta, 236) その人は彼女の肩布をつかまえた。

Sed ni orde **kondukas** ilin **je** la (＝ilia) nazo. (Rabistoj, 53) 奴等の鼻を摑んで奴等をチヤンと引きまわしているんだ (牛耳つている)。

Ili ekkuregis, kaptis la ĉevalojn **je** la kondukiloj. (Fab., II, 66) 彼等は馳つて手綱をとつて馬を捕えた。

Ŝi **tenis** la kolombon **je** la piedoj. (Fab., II, 68) 足をつかんで鳩を手にと

らえていた。

Oni **pendis** lin **je** la piedoj inter du hundoj. (Rabe o, 28) 彼を二匹の犬の間に逆吊にした。

〔注意〕(h) 誤解が起らぬ場合には勿論 je 以外の前置詞も用いられる：

Li kaptis Schweizeron *ĉe* la kolo. (Rabistoj, 22). シュワイツェルの首玉をつかまえた。

Iu kaptis min *ĉirkaŭ* la korpo. (Fab., II, 79) 私にだきついた者があつた。

(C) 『信用』と『信仰』

Mi ne **kredas** li*n*. 彼を信じない。
Mi **kredas al** li nenio*n*. 彼の云う事は何も信ぜぬ（彼に信用を置かぬ。
Mi ne **kredas je** Dio. (Revizoro 8) 神を信仰せぬ。

信仰，即ち神の在る事を信じ，神の本格を信ずる意を區別する爲め kredi je を用いたものである。

En mia infaneco mi **kredis je** Dio kaj **je** senmorteco de l' animo. (Originala Verkaro, 358) 子供の時は神や靈魂の不滅を信じたのでした。

〔註〕 en personeco (en esenco) の en を用いて *kredi* **en** Dio を用いる人もある。

(Ĉ) 習慣用法。他の前置詞中にどうしても適當と思われるものがない時，殊に前置詞を用いてはその本來の意味があまり強く響いて云わんとする感じが出ぬため，je を用いてぼかす方が反つてよい場合。（これはなお幾分云う人の習慣色彩を帯びている）。

Je nia granda **miro** tiu malsaĝulo brile sukcesis. 吾々の驚いた事には（以外な事に）あの馬鹿が大成功。

〔註〕 **Je mia ĝojo**『私の嬉しかつた事には』, **je mia bedaŭro**『遺憾乍ら』なども同じ。英語では to... を用いる所であるが，Esp. では **AL** の **5D**【到達の結果】の條で述べた如く al が用いられることは稀である。Al の例：

Ĝuste *al la malfeliĉo* oni ordonis al la administranto doni la plej bonan ĉevaltrion. (Revizoro, 96). おまけに正に不幸な事には一番よい三頭立ての馬車を與える樣に當事者に命令を發してしまつた事です（追手はきかぬ）。

但し此の例は al によつて『おまけに，不幸に加うるに』の意がきいている。

Ŝi rakontis al unu el siaj fratinoj, kaj baldaŭ tiam sciiĝis ĉiuj aliaj, sed **je vorto de honoro** neniu pli ol tiu. (Fund. Krest., 44). 彼女は姉の一人に話して聞かせました，するとやがて他の姉も皆知つてしまつたのです，然し全くの話（名譽の一言にかけて實事であるが）どの他の姉も始めの姉以上には知る所はなかつたのです。

〔註〕『かけて』の **per** を用いてもよい。又前置詞省路目的格にした例もある：

Vorton de honoro! tio estas virino neordinara. (Marta 184) こりや正銘型ちがいな婦人ですな。

Preskaŭ absoluta mallumo regis ĉirkaŭ ŝi, kaj tamen ŝi ne **puŝiĝis je** kruta ŝtuparo. (Marta 217) あたりは殆んど眞の闇であつたけれど彼女は急な階段につまずき（ぶつかり）もしなかつた。

La vojo de malpiuloj estas kiel mallumo; ili ne scias, **je** kio ili **falpuŝiĝos**. (Sentencoj de Salomono, 7) 不信心者の道は闇の如し，何につまずい

て（行き當つて）倒れるや知らざるなり。

〔註〕 しいて他の前置詞を用いれば **ĉe** 又は **kontraŭ.** 〔比較〕 *faleti* **super** ŝtono 石につまずく。

Ties karnon mi disŝiros **je pecetoj.** (Rabistoj, 121) そやつの肉を粉ごなに引き裂いてやるぞ。

La artefaritan birdon mi batos **je mil pecoj.** (Fabeloj, II, 31) その人造鳥を粉々に打ちこわしてやる。

〔註〕 Al pecoj を用いた例もある：
La bestego disŝirus min *al pecetoj.* (Rabistoj, 20) その獸はおれを片々に引き裂いたかも知れぬて。

La lacigita cikonio estis la lasta en la vico, kaj baldaŭ ĝi restis **je** granda **distanco** malantaŭe. (Fab., II, 6) その疲れた鸛は列の最後になつたがやがてぐつと後れてしまつた。

En la sekvanta jaro la malgranda abio estis jam **pli granda je** unu trunkido. (Fab., II, 42) 次の年になるとその小い樅はもう一と若幹だけ大きくなつていた。

En rapideco ili **preterpasis ŝin je** kelke da paŝoj. (Marta 225) 急いで彼女を數歩行き過ぎた。

〔註〕 此等の『だけ』に當る je は數量の *per* を用いることもある。

Je via letero mi **respondas** al vi la jenon. (Grabowski) 御手紙に對し次の事を貴下にお答えします。

〔註〕 al vi があるから al via letero ではまずい。又 pri でもない。强いてかえれば **koncerne** via*n* letero*n*.

Ŝi **ekfrapetis** per la fingroj **je** la fenestraj vitroj. (Fab., II, 101) 指で窓ガラスを叩いた。

Ŝi **ekfrotis** la alumeton **je** la muro. (Fab., II, 113) マツチを壁にこすつた。

〔註〕 **sur** la fenestraj vitroj, **kontraŭ** (*aŭ* **sur**) la muro でもよいが，そうすればあまり規帳面な sur, kontraŭ の意が出すぎる。結局わざと je で輕く云つた例。

Mi **je** dudek kvin **paŝoj** trafas en kvinkopekan moneron. (Fund. Krest., 84) 僕は二十五步置いて擊つて五錢玉に命中させる。

〔註〕 ĉe (la distanco de) dudek kvin paŝoj の意。

Unu fojon la sukeraĵisto kaptis min per la kolumo pro la kuketoj, kiujn mi formanĝis **je la kalkulo** de la enspezoj de la angla reĝo. (Revizoro, 93) 僕がその菓子を平げて英國々王の收入の附けにして勘定を取つてくれとやつたので菓子屋の親父に胸倉をとられたことがあつたつけ。

Li prenas ĉion **je la kalkulo,** kaj eĉ unu kopekon ne volas pagi. (Revizoro 14) 彼は何でも附けで取つて一錢だつても拂おうとしない。

〔註〕 他の前置詞を强いて用いれば **per** kalkulo であるが，それでは『計算をして』の通常の意にもとれるので je を用いてぼかして區別を立てたもの。

Ĉu vi eble havas iun **malsanan je** la brusto en via estimata familio? (Fund. Krest., 81) 御家族中に胸を病んで居られる方がおありでないですか。

〔註〕 ĉe でもよいが少し具象的に過ぐ。

〔四月號正誤〕 p. 30, 左欄下より 12~11 行：la viro estas trinkanta は la vino estas trinkata.

岡本好次

ザメンホフ文法術語研究・7

Prepozicio, konjunkcio, interjekcio

13. prepozicio

前置詞(prepozicio)については十六ヶ條文法中には次の二條がある。

Ĉiuj prepozicioj per si mem postulas la nominativon. (第八條)

Ĉiu prepozicio havas difinitan kaj konstantan signifon; sed se ni devas uzi ian prepozicion kaj la rekta senco ne montras al ni, kian nome prepozicion ni devas preni, tiam ni uzas la prepozicion *je*, kiu memstaran signifon ne havas. Anstataŭ la prepozicio *je* oni povas ankaŭ uzi la akuzativon sen prepozicio. (第十四條)

尙十六ヶ條文法中前置詞にふれている項に次の如きがある。

La substantivoj ... La ceteraj kazoj estas esprimataj per helpo de prepozicioj (la genitivo per *de*, la dativo per *al*, la ablativo per *per* aŭ aliaj prepozicioj laŭ la senco). (第二條)

La verbo ...; la prepozicio ĉe la pasivo estas *de*. (第六條)

Ekzercaro 中で特に前置詞の用法についての説明がある部分を次に引用してみる。

Ĉiuj prepozicioj per si mem postulas ĉiam nur la nominativon. Se ni iam post prepozicio uzas la akuzativon, la akuzativo tie dependas ne de la prepozicio, sed de aliaj kaŭzoj. Ekzemple: por esprimi direkton, ni aldonas al la vorto la finon „n"; sekve: tie (=en tiu loko), tien (=al tiu loko); tiel same ni ankaŭ diras: „la birdo flugis en la ĝardenon, sur la tablon," kaj la vortoj „ĝardenon", „tablon" staras tie ĉi en akuzativo ne ĉar la prepozicioj „en" kaj „sur" tion ĉi postulas, sed nur ĉar ni volis esprimi direkton, t.e. montri, ke la birdo ...; en tiaj okazoj ni uzus la finiĝon „n" tute egale ĉu ia prepozicio starus aŭ ne. (§28)

Se ni bezonas uzi prepozicion kaj la senco ne montras al ni, kian prepozicion uzi, tiam ni povas uzi la komunan prepozicion „je." Sed estas bone uzadi la vorton „je" kiel eble pli malofte. Anstataŭ la vorto „je" ni povas ankaŭ uzi akuzativon sen prepozicio. (§29)

これら Ekzercaro 中の説明は上記十六ヶ條文法の説明を多少敷衍したもので, 大體同樣のことを説明したにすぎない。

Lingvaj Respondoj 中で前置詞についての説明は三ヶ所にある。其の一は p. 48–52 に亘つて主として akuzativo と前置詞の關係を説明したものでこれは上記の十六ヶ條文法及 Ekzercaro の説明を敷衍したものにすぎない。次にその一部分を引用する。

La akzativo en nia lingvo neniam dependas de la antaŭiranta prepozicio (ĉar la prepozicioj per si mem neniam postulas ĉe ni la akuzativon), sed nur de la *senco*. La akuzativon ni uzas nur en tri okazoj:

a) por montri ...

b) por montri direkton ..., se la prepozicio mem tion ĉi ne montras; ekzemple ...

c) en ĉiuj okazoj, kiam ni ne scias, kian prepozicion uzi, ni povas uzi la akuzativon anstataŭ la prepozicio «je»; ekzemple en la esprimo «mi kontentiĝas tion ĉi» la akuzativo ne dependas de la verbo «kontentiĝas» sed anstataŭas nur la forlasitan prepozicion «je» (=ni kontentiĝas je tio ĉi). (以上 p. 48)

Kiel ĉiu alia prepozicio, tiel ankaŭ

«anstataŭ» per si mem postulas ĉiam la nominativon; se tamen ofte oni trovas ĉe bonaj aŭtoroj post «anstataŭ» la akuzativon, tiu ĉi lasta estas uzita ne pro la prepozicio, sed pro aliaj cirkonstancoj. (以上 p. 49)

Povas esti, ke mi baldaŭ proponos al la voĉdonado de la Lingva Komitato, ke post prepozicio oni uzu la akuzativon nur en okazoj de *nepra bezono*, sed en ĉiuj iom dubaj okazoj oni ĝin ne uzu... Nominativon ni uzas nur post tiuj prepozicioj, kies senco estas ĉiam egala; ...; sed ekzistas prepozicioj, (...), kiuj per si mem *ne* montras direkton, tial, por esprimi direkton, ni uzas post ili la akuzativon. (以上 p. 51)

LR 中前置詞についての第二の說明は p. 76 の adverbo-prepozicio についてのものである。adverbo-prepozicio については既に adverbo の項に於て述べたからこゝには述べない。

LR 中前置詞についての第三の說明は p. 81-84 に出ている krom, ekster, al, da, de, per, po 等の個々の前置詞についての說明である。

Fundamenta Krestomatio 中には前置詞についての文法上これといつて取たてるほどの記述はない。(但し同書中 Ekz. 及 Plena Gramatiko の部分を除く)。

前置詞に關係ある特別の術語とゆうべきものはない。

前置詞をその意味によつて，時の前置詞 (tempa prepozicio), 場所の前置詞 (loka prepozicio) 等いろいろに分類する人もあるが，これは文法上さして用のないことである。ザメンホフはこういつた云い方をしていないようである。

又 favore al, koncerne al 等の副詞＋前置詞の形の所謂「句の前置詞」とゆうものについてザメンホフは何も書いていない。Kalocsay-Waringhien は之を prepoziciaĵo とよんでいる。

句の前置詞の前置詞を省略して次にくる名詞を目的格とし副詞を前置詞代用に用いた時ザメンホフは之を adverbo-prepozicio とよぶのである。即ち形が adverbo で職能は prepozicio である。しかし本當の prepozicio でないからその次へ來る名詞は常に目的格とならねばならない。だから之はやはり prepozicio とゆうよりも adverbo とゆう方がよいと思う。prepozicia adverbo とよぶのは結構と思う。(この呼び方は LR にある。但しザメンホフがかくよんだかどうか疑問である)。

ザメンホフは LR の中で spite を前置詞の如く取扱つているが之はあくまでも adverbo-prepozico として取扱うべきだと思う。

14. konjunkcio

接續詞 (konjunkcio) についての說明は十六ケ條文法中には何もない。Ekzercaro 中にもない。LR 中には kaj について述べているが之も kaj とゆう接續詞の文法上の用法をのべたものでなくザメンホフが kaj の意味の接續詞としてラテン系の et とか e をとらずしてギリシヤ系の kaj をとつたことについての說明にすぎない。

接續詞はその使用上左程むづかしいものでないから詳しい說明がないのである。

ザメンホフは接續詞を LR 中で liganta vorto とゆう語でよんでいる場合がある (LR p. 49)

Kaloscsay-Waringhien は接續詞の外に subjunkcio とゆう新しい術語をつくり從來接續詞に含めていたものを二分して konjunkcio と subjunkcio とにしている。即ち彼等によると konjunkcio は aŭ, kaj 等の如く對等の價値をもつた propozicioj(文) を接合する語であり，subjunkcio は ke, se 等の如く一方の propozicio(文) を他の propozicio(文) に從屬せしめる役目をする語である。subjunkcio を國語に譯すればまず從屬詞とでもよぶべきかと思う。日本人にはこの分類がわかりがよいかもしれない。それはこの分類による konjunkcio は日本語の接續詞とその用法が全く同一であり subjunkcio は日本語では別の語を用いて表現するものといつてよいからである。

15. interjekcio

伊藤己酉三

和文エス譯研究會

6

指導者　A 氏
會員　B, C, D, E, F 氏

A: 毎回缺かさず御出席下さいまして大いに張合があります。今日の題は

彼の言う理窟は充分筋道が立つているようだが，何となく卽座に賛成出來ない感じがしてならない。

です。難しい言葉はない代りに譯し難い點が多いかも知れません。先づ「**理窟**」はどうしますか。

C: rezonado はどうでしよう。

F: teorio か logiko の方がよいように見えますが。

D: 私は argumento を使つた方がよく思います。どうもはつきりしないんですが。

A: teorio は理論，logiko は論理で兩方共場合によつては理窟の譯になります。例えば Ne ĉio iras laŭ la teorio. (何でも理窟通りに行くとは限らない)。Logiko tion montras. (理窟はそうだ)。しかし此處では適しません。そこで rezoni はとゆうと「論理的に考え進めて行く」ことで，例えば Rezonado ne helpas al la savo de la situacio. (理窟を並べてみたつて事態の解決には役に立たない)の場合がそうです。それから argumento は rezonado による證明，つまり議論をして，自說が正しいとゆう證明をする爲に持出す理窟です。例えば Liaj argumentoj estas tute senbazaj. (彼の持出す理窟は出鱈目だ)。此場合はどちらかとゆうと argumento の方がよいと思います。

次の「**筋道が立つ**」はどうですか。

E: rezonebla はどうでしよう。

F: rezona でもよいかも知れません。

B: 私には何だか rezonebla は變な氣がしますが，prava か ĝusta がよいのではありませんか。

C: 整然としているとゆう意味で bonorda はどうです。

A: 「新撰和エス」に筋道が立たぬを nerezonebla と譯してありますから筋道が立つのは rezonebla でよさそうですが，この場合にはどうでしよう。例えば，Lia kolero estas nerezonebla (彼の怒るのは筋道が立たない，理由がない)。Lia subita foriro estas rezonebla (何故彼が急に立去つたかわかる) でおわかりになるでしようが，rezonebla は推理し得るの意味です。此處では間違いないの意味ですから ĝusta, prava がよいようですが，充分とゆう言葉があるので sufiĉe ĝusta とか nesufiĉe ĝusta とかゆうのは變です。從つて logika がよいと思います。又 logika とは意味は違いますが，konvinka も惡くないようです。之はこの位にして次は「**何となく**」です。

B: iel ですか。

D: ial でしよう。

C: neklarigeble としたら。

A: iel は en ia maniero つまり何とかしてです。neklarigeble は惡くありませんが之よりは pro ia neklarigebla kaŭzo とした方が感じがよろしい。ial は pro ia kaŭzo で適當です。

次は「**卽座に**」です。之は誰でもすぐ tuj

間投詞 (interjekcio) は感嘆詞とも云われ主として喜怒哀樂の情を示す叫聲の如きものであるからである。併し之には擬聲語 (anomatopeoj) の如きものもすべて含まれるもので間投詞とゆう方が合理的である。これは他の品詞とは性質の全く異つたものでその中の或種のものは語 (vorto) とゆう kategorio の中に入らぬ程のものもある。

十六ケ條文法を始め Ekz. FK. LR には interjekcio に關した說明は一つもない。

を考えられるでしようが，其他には？

E： senprokraste なんか如何ですか。

B： senpripense でもよいかと思います。

A： senprokraste は猶豫しないで，つまり卽座にの意味になりますが，この場合の卽座は時間的の卽座よりは，豫めよく檢討しないでの意味ですから，必ずしも惡いとは言えないかも知れませんが，充分ではないようです。そうすると次の senpripense がよいと考えられますが，senpripense は「輕卒に」の意味で，この場合意味は充分に通じますけれども，senekzamene とした方がよいかも知れません。

最後に「**贊成する**」を願いましよう。

B： konsenti か jesi ではどうでしよう。

F： aprobi はいけませんか。

D： subteni もある。

E： 私は konsenti が一番よいと思います。

A： 考え方で何れでもよいでしようが，konsenti がよさそうですね。

之で語句の檢討は終りましたから全文を譯して頂きます。最後の「……**してならない**」が一番難しいので，種々書き方があるでしようがよくお考え下さい。

C さんのを先ず書いてみます。

La argumento, kiu li insistas, ŝajnas al mi sufiĉe taŭgas al logiko, sed mi iom sentas, ke mi ne povas konsenti tion senekzamene.

F： kiu は kiun とすべきものでしよう。iom sentas は充分に意味が出ていないようです。

D： taŭgas al logiko は變ですね。

A： そうです。ŝajnas al mi の次にも komo を入れて estas sufiĉe konforma al logiko とでもすればよかつたのです。insistas も asertas の方がまだよかつたですね。感じられてならないは感じを禁ずることが出來ないの意味です。この點は他の方の譯を見ましよう。

次は B さんのです。

Kvankam lia argumento ŝajnas al mi, ke ĝi enhavas sufiĉan logikon, tamen mi ial hezitas senekzamene konsenti lin.

E： enhavas logikon はどうでしよう。何だか少しおかしいようですが。

A： logikecon とすればよいのでしよう。hezitas も大分近いが充分ではありません。

D さんのは

Lia argumento ŝajnas esti sufiĉe logika, sed ial mi ne povas ne senti ke ĝi detenas min de tuja konsento.

大體結構です。ial は detenas の前に置く方がよいのではないかと思います。

F さんのは

Lia argumento estas ŝajne sufiĉe logika, sed tamen la impreso bedaŭre estas, ke mi ial ne povas esprimi tujan konsenton al ĝi.

bedaŭre は je bedaŭro か bedaŭrinde が普通です。impreso estas, ke... では少し弱い感じがあります。impreso を使うなら mi ne povas forigi la impreson, ke... とでもしたら大體近くなりましよう。

私はこんな風に譯してみたいと思います。

Liaj argumentoj ŝajnas esti sufiĉe logikaj, sed, tamen, mi ne povas forskui de mi la senton, ke ili ne estas senekzamene konsentebla.

Unuavide liaj argumentoj ŝajnas esti sufiĉe logikaj, sed, tamen, ne forlasas min la sento, ke ili ne estas konsentebla sen kontrolo.

次の問題は

逆は必ずしも眞ならずと人が言う通り，エス文和譯は樂だが，和文エス譯はとても難しい。

で「逆」の譯は難しいかも知れませんが，其他は樂です。

では「**逆**」をお考え下さい。

F： malo か kontraŭo はいけませんか。

A: 「逆」とは入換りで單なる反對ではありませんから kontraŭo では不完全です。

C: renverso は入換りになりませんか。

D: inverso の方がよいと思います。

A: renverso は元來は上下の顚倒ですが一般の入換りにも用いられないことはありません。しかし inverso の方が此處ではよいでしよう。例えば Soldato tenis sian pafilṇ renverse sur ŝultro.（兵隊が鐵砲を逆に肩にかついだ）。Ili nun troviĝas en tute inversa situacio.（彼等は今や全く逆の境遇にある）。

「エス文和譯」は種々書き方がありますが皆さん各自のお考えを承りましよう。

E: traduki Esperanton japanen.

F: esperanto-japana traduko.

C: traduko de Esperanto en japana lingvo.

D: traduki el Esperanto en japanan lingvon.

B: japana traduko de Esperanto.

A: エス文和譯はエスペラントを（から）日本語に譯すことで traduki el Esperanto en japanan lingvon となるわけです。之を名詞にすれば tradukado el Esperanto en japanan lingvon です。japanan lingvon を japanen とすることもあります。皆さんの譯も大體わかることはわかりますが, traduko は tradukado と tradukaĵo の兩方に使われますから, はつきり tradukado とした方がよろしい。原語に對しては de を用いず el を用いるのが普通です。**「和文エス譯」**は丁度之と逆の關係になるわけです。**「樂」**は facila 以外には一寸なさそうです。では譯文を作つて下さい。F さんのを先ず。

Kiel oni diras, ke la inverso nepre ne estas vera, tradukado el Esperanto en la japanan lingvon estas facila, tamen tradukado el la japana lingvo en Esperanton estas malfacila.

E: nepre ne は反對ですね。これでは絶對に眞ならずとなるようです。

C: 後の lingvo は略した方がよくありませんか。

A: E さん, C さんの言われる通りです。序に tradukado も略して構いません。vera は vero と名詞にすべきでしよう。vera とすると本當の逆ではないとなります。

次は E さんのです。

Kiel oni diras, ke inverso ne estas ĉiam vera, traduki el la Esperantan en la japanan lingvon estas facile sed el la japana en la Esperantan estas tre malfacile.

D: 最初の Esperantan の -n を取る必要がありますね。それからこの形容詞になつているのは lingvo を略してあるのでしようが, Esperanta lingvo としなくても Esperanto だけでよいのではありませんか。

A: 特に必要がなければ Esperanto の方がよいでしよう。

次は B さんのです。

Traduki el Esperanto en la japanan lingvon estas facile, sed el la japana lingvo traduki en Esperanton estas treege malfacile, kiel oni diras ke la inverso estas ne ĉiam vera.

どうも vera が多いようですね。ne ĉiam は惡くはないでしようが, ne en ĉiu kazo とすれば尙よいのではないでしようか。そうするとこの文は次の通りになります。

Kiel oni diras, ke inverso ne en ĉiu kazo estas vero, tradukado el Esperanto en la japanan lingvon estas facila, sed el la japana en Esperanton estas tre malfacila.

何か御質問でもあれば伺いましよう。

D: 前の話なんですが, aeropremo super la maro とゆうのがありましたが, aeropremo は海面で計られるものとすれば sur でもよいのではありませんか。

A: atmosfera-premo は海面で計るのですが,「海面での氣壓」なら勿論 situas sur la maro となるのですが, となると何か海面に浮

んでいるような感があります。海を蔽つている，そして廣く擴つているのですから super としたわけです。

D: それから國民再組織の國民は政府對國民の關係にある國民卽ち人民と解されるのですが，それでも nacio でよいでしようか。

A: あの場合の國民は果して政府に對する國民でしようか。それなら popolo の方がよいでしよう。私は政府に對する國民だとは考えていませんでした。

D: もう一つ國民精神總動員の精神は moral support (精神的支持)等の場合の精神に近く感ぜられますが，spirito をこの意味に使つてよろしいでしようか。

A: morala apogo の morala は物質的に對する精神的の意味で spirita と大體同じです。何だか逆にお考えになつているのではありませんか。つまり morala を spirita の意味に使つてよいかとゆう御質問ならわかりますが。

では今日は之で閉會としましよう。

Konisi-Norio 氏 subteni と不定法を用いてあるのは不可。

Yama-R. 氏 ―― aprobi は esti aprobata とし，tuj は ne の次に置くこと。

Gifu-ano 氏――iel の次に主語が要る。

增田氏――li d'rinta は de li dirita の意であろう。Kiel は不要。後半は全然書改める必要がある。

空美子氏 ――kvazaŭ は kvankam の誤りである。sed は不要。kiel se は kvazaŭ と同じである。

中室氏――tradukas の主語がない。

田中氏――dirite と副詞を使う。ke は主語，述語を含む frazo を連結するものである。traduki... は frazo ではなくて frazero である。ke は不要。ĉar は same とすべき所であろう。

成績發表

a. 申し分のないもの。
b. 多少缺點はあるが全體として勝れたもの。
c. 致命的は誤謬はないが b に劣るもの。
ĉ. 缺點の可成り目立つもの。
d. 尙多少研究を要するもの。
名前の載らないものは充分エス文の構成に就て研究を要す。

A.

a. Valo.

b. Legorokulo, Fantomo Etiopia, O-h, M. Inaba, Sen' Ok, TIMUR, Toncju, ミミ，ミノル，綠星子，井手尾元治。

c. Dra o, 林眞澄，加藤淸之助，Junulo, Humi Sogen, プロンテオン。

ĉ. H. Klorofilanto, Koiĉjo, Konisi-Norio, Yama-R., Gifu-ano.

d. 河村義之，增田，空美子。

B.

a. 村上優爾。

b. forĝisto, aĉulo, Militkuracisto, Tondro, SEMJ, Orfiŝo, トト，永江淸，K. Kobajaŝi, ヒデオ, Makita-S, Teruo, 笠雫。

c. 田中新一，中室員重，Ruĝa Planedo, 佐々木久子，秀樹狂子，紗那子，Seiu Sogen, 彤星，Ueda-Masao, 星尾。

新課題

A. 前駐米大使齋藤博氏の遺骨を載せたアストリア (Astria) 號は 4 月 17 日橫濱に入港し，日米親善の實を擧げた。

B. この小說は私の趣味に合わない。もつと高尙なものなら譯す氣になるんだが。

規定 制限：A, B いずれか一方を擇んで應募すること。(兩方へ應募したばあいは A の分を無効にする)。

氏名：誌上での匿名は自由であるが，原稿には，必ず住所氏名明記のこと。

用紙：ハガキまたはハガキと同じ型の紙。

締切：5 月 5 日着便。

宛名：學會內「和文エス譯」係。

Supersigno について

川崎直一

1　Esp には ∧ ∪ を上につけた字だけだが，いろいろな言語には，しるしが字の下についたり（例：フランス語 ç），眞中についたりするのもある（例：ポーランド語の ł）。ところでローマ字 26 文字のうち，世界中どこの言語を探してみても，しるしがつかないという字がはたしてあるだろうか？　世界中の言語を調べねばならないわけだが，The Gospel in many tongues, 1935 という 692 の言語（文字）に譯された聖書の 3, 4 行ほどを拔いて集めた本があるので，まずそれを使うことにする。Alfabeto を書いておいて，この本の中にしるしのついた字がでてくると，alfabeto 中のその字を消してゆく（p がみつかれば，p を消す）結果はどこかの言語でしるしのつかない字は alfabeto 中たつた j, q, x だけだ。これらとてこの本にはあらわれなかつたが，どこかの言語でしるしがつくのかもしれないが，手早く片ずけるために，Soveta Unio ソヴエート同盟内でつくられた「新アルファベット」をだしてみる。これはソヴエート同盟内にあるたくさんの言語の音聲を寫すためのものであるが，かなり實行されつつある。その中にしるしのついた j, q, x がある。

2　Esp の ŝ, ŭ のようなのを Zamenhof はどこから考えたのか？　韻律學では昔から長を − で，短を ∪ であらわして來た。ドイツ語では筆記體のとき ŭ に似た字（そして似た發音）を書くし，ロシヤ語にも筆記體に ŭ（ただし發音は j）がある。Zamenhof には關係がないかもしれないが，ルーマニア語のある正字法では ŭ を使つている。Jesperson, International Language は「ŝ, ĉ などはチェック語からヒントを得たのであろう」と言つているが，あるいはそうかもしれない。だがチェッコ語では š, č である。（發音は ŝ, ĉ だが）。Esp のような ŝ, ĉ が Esp 以前にあつたろうか？　母音 â, ê のようなのは珍しくないが，子音の上につけた場合である。結局 Esp で ŝ, ĉ を使うことは Zamenhof の考えだしたものと思われる。もつとも音聲學の建設者 Rousselot の使つた發音記號中に ŝ, ẑ などあるが，これは demiocclusive（半閉塞）をあらわし，Esp のそれとは關係がないようだ（彼がこの記號を作つた年代を知らないが）。

3　š, č でなく Esp 流の ŝ, ĉ は Esp 以外で眞似られたことはなかつたか？　日本語のエスペラントローマ字とかゆうものは知つているが……偶然讀んでいた Gautherot 著，Meier 譯，Esp kaj Ido, p. 8 に「Christian Monier が世界の geografiaj nomoj を fonetike に transskribi するために新な alfabeto を考えだした，それで 1899 年に Institut de France から Volney-premio をもらつた。それには sonoj „tch“, „ch“, „dj“ estas figuritaj per ĉ, ŝ, ĝ,—tute kiel en Esperanto!」とある，しめた，さては Esp をまねしたのだな！と喜んで，自分のノートに採錄したり，人に報告したりした。ところがしばらくしてこの Monier の原本を見る機會を得た。あにはからんや，ŝ, ĉ でなく，š, č だ。失望落膽，孫引のあぶないことかくのごとし。

LITERATURO KRESKAS 新刊紹介

BELETRISTIKO

1. Romanoj kaj noveloj

PATROJ KAJ FILOJ, de I. Turgenjev, trad. de Kaz. Bein, eld. de Sennacieca Asocio Tutmonda, Paris, 1939; 14×21cm. 215p. prezo: broŝ. 35 fr. fr., bind. 45 fr. fr.

ツルゲーネフのこの傑作は，父と子との時代がくりかえされる限り，忘れられないであろう。エスペラント譯は，エスペラント文章史上に最も大きな光を放つて消えてしまつたKabe の手になるもの。1906 年に出版されたこの飜譯は，エスペラント飜譯文學の古典的文献であるが，すでに早く絶版となり，おしまれていた。今度 SAT と Nederlanda Federacio de Laboristaj Esperantistoj の共同企劃により Nova Romanserio が刊行されることになるにあたり，それの第1篇として出された。

この再版において注意すべきことは，SAT の Literatura Komitato によつて手が加えられていることで，初版における文法的誤りが訂正され，また，誤りでなくとも，十分でない語法については，卷末に注意が添えてある。(M)

LA RINGO DE LA GENERALO, de Selma Lagerlöf, trad. de Stellan Engholm; eld. de Eldona Societo Esperanto, Stockholm, 1939; 13×19.5cm, 128p. prezo: 2kr.

"Junulino el Stormyr", "Mono de S-ro Arne", "Gösta Berling", "Infano el Betlehem" 等の偉れた作品の飜譯によつて，われわれに親しい，スエーデンのノーベル賞作家ラエルリョフ夫人の中篇小說。例によつて骨の髓にからみつくような古譚風な物語で，死んだ將軍の墓から盜みとられた指環の行衛を追つて，つぎつぎにおこる不吉なできごと——"Mono de S-ro Arne" に出て來たような幽靈が，ここにも出て來る。忘れがたいのは，この北ヨーロッパの農民の，火に對する親しみのありさまを描き出した一場面である。エスペラント譯は，Engholm であるから，ほとんど無條件で推薦することができる。

(M)

COLOMBA, de Prosper Mérimée, trad. de J. Beau, eld. de Esp. Publishing Co., Rickmansworth, Anglujo, 1939; 11×18cm, 184p. 定價2圓（送料6錢, 在庫數部あり）

ビゼーの歌劇でなだかい「カルメン」の原作者メリメの好んで描いた南國的な情熱を扱つた小說のひとつ。エスペランティストによく知られている「マテオ•ファルコネ」とおなじく，コルシカ島を舞臺にし，「マテオ」で，この島の人々の正義感を寫した作者は，ここでは，「君父の仇とは俱に天を戴かない」とゆう舊時代の日本人にそつくりの，彼らの持つ復讐の精神を描いている。したがつて，美しくはあるが，復讐の鬼のような，冷酷なコロンバ，長らくフランスの文明の風にあたつて復讐の精神を忘れた彼女の弟，日本の山賊と俠客の中間的存在のような浮浪の徒——これらのあいだに醸される事件を讀んでいると，日本の大衆小說を讀んでいるような氣がする。(M)

UNDINO, de Olive Schreiner, trad. de S.A. Andrew, eld. de Esp. Publishing Co., Rickmansworth, Anglujo, 1938; 12×19cm, 283p, Prezo: 3ŝ. 6p.

著者 Schreiner 夫人の名は，その人の最傑作であり，彼女の處女作と思われていた「アフリカ農園物語」(Romano de Afrika Bieno) の飜譯によつて，エスペランティストには親しみのあるものである。"Undino" は，「農園物語」におくれること 46 年，著者の死んだのちはじめて出版されたものではあるが，實は，これが眞の處女作で，彼女の 16 歲のとき創作に着手されたものであり，彼女の死んだのち，ハヴァロック・エリスの助言で，その夫によつて，原稿が發見され出版されたものである。これは，"Romano" とともに，彼

女の自傳的小說で，時代的に "Romano" に先んじるものである。舞臺はおなじく南アフリカであり，因習に反抗し自己を主張する女性の步む荊棘の道を描いたものである。

(M)

PATRO KAJ FILO, (Muusses Esp. Biblioteko N-ro 19) de Jordan Jovkov, trad. de Ĥristo Iskrov, eld. de J. Muusses, Purmerend, Nederlando, 1939; 13×19cm. 35p. prezo: 0.35f.

著者は，ブルガリアのなだかい作家。これは，その人の短篇を集めたもので，村の居酒屋で「强盜」に出あつた父と子のほほえましい物語 "Patro kaj filo" の他に，狼を自分の讐とねらう低腦兒の "Du malamikoj", 田園詩風の "Kolombo ĉe fenestro", 怪談めいた "La cervino" 等。譯はひととうりのもの。(M)

2. Dramoj

VIRINA KORO, de Maurits Sabbe, trad. de D. Mortelmans, eld. de Katolika Esp. Instituto, Wilrijk, Belgujo, 1939; 13.5×19.5cm., 26p. prezo: 5f.

一幕劇。娘の戀愛に對する，戀愛結婚に破れた母の心理の變化を描く。はじめは，娘が自分とおなじ不幸をくりかえすことをおそれて，その戀愛に反對したのを，自分の不幸の過去のおもいでが悦びと幸福のみであることに目覺め，その結婚を許すとゆう筋。譯文はだいたいよいようであるが，相關詞の用い方におもしろくないのがある。(M)

PASOJ ĈE PORDEGOJ, de Bernardo Ojasono, eld. de aŭtoro, Märjamaa, Estonio, 1939; 13×19cm. 24p.

原作の一幕韻文劇。おなじ著者が，このまえの著書 "Fragmentoj" で，試みたとおなじ言語上の試みをしている。i, as, is, as, ... を esti, estas ... に代えて用い，分詞へ直接動詞の語尾をつけるなど。これらの試みをまねることは，勿論いましめるべきであるが(今回は，韻文であるから，グラボウスキイの先例もあるわけではあるが，グラボウスキイのは poeta licenco として用いたのであるが，この人のは原則として用いたのであつて，その精神においてことなつている)，受動分詞のつぎにおかれる，發動者を示す前置詞 de のかわりに，從來試みられていた，age de, agde を一步すすめて ag としているのは一應記憶にとめてよいであろう。(M)

3. Poemaro kaj Kantaro

AMO: FONTO DE VIVO, de Célestin Roussean, LK. 13.5×18.5cm. 16p. Esp-ista Centra Librejo, Paris, 3 fr. fr.

Poliglota Vademecum de Internacia Farmacio の大著のある sciencisto だが，このごろはよく文藝ものを出版する。

「Edeno を失つても，男は女の愛に生きた。過ぎし日の我が戀の思い出よ，我が夢の望みに答えよかし！」

Edeno の美しい描寫：

Ĝis la bordo de klara fonteto (ĉar varmo
jam ardas)
Li sin gvidas, piede premante la tufojn
humilajn.
Etendataj sur herbo jen ili kokete ri-
gardas
La spegulon, por vidi sur akvo la trajtojn
rebrilajn.
Li kolektas sur nufarfolion la fruktojn
plej noblajn,
Kaj spinas en ŝiaj okuloj la signon de
ĝojo;
Kaj vespere por ŝi li pretigas branĉetojn
flekseblajn
Surkovritajn per fojno, kun floroj de
blanka levkojo.

(KAWASAKI-N.)

ESTONAJ KANTOJ EN ESPERANTO, eld. de Esperanto-Asocio de Estonio, Tallinn, 1931; 10.5×15, 28p.

愉快な氣持で歌うことのできそうなものが22 篇おさめてある。樂譜がついてないのが殘念である。(M)

SCIENCO

FLUGADO ALIMONDEN, (Muussess Esp. Biblioteko N-ro 18) de Ernest Dodge

eld. de J. Muusses, Purmerend, Nederlando, 1939; 13×19cm. 32p. prezo: 0.35f.

著者 Dodge は，アメリカの古いエスペランチストで，いままでにも "Mezurado de l' Universo", "Plibonigo de la muzika skalo" その他の論文を書いている。この小册子には，星の世界への旅行——あるいは移民が，將來において，かならずしも不可能でないとゆうことを説いてあり，その交通機關ロケットの理論を，科學について知識の低いものにもよくわかるように書いてある。空想小説とはちがつて，どこまでも科學の立場から書かれてある。(M)

EDUKADO

KIEL EDUKI NIAJN INFANOJN?, de D-ro Ad. Ferrière, trad. de H. Ith.-Wille, eld. de J. Muusses, Purmerend, Nederland, 1939; 13×19cm. 71p. prezo: 2 ŝ.

しばらく活動を中止しているかに見えた TAGE (Tutmonda Asocio de Geinstruistoj Esperantistaj) は，この論文の飜譯出版によつて，新しい第 1 歩を踏み出そうとしている。原著者 Ferrière 博士は，國際新教育聯盟評議員で，この論文は，近年世界に起つて，教育の理論と實際に對して根底的な變革をもたらした，教育界の大革命である新教育の實驗例について述べたものであるが，讀者として，著者が求めているのは，教育學の專門家のみでなく，初等教育の實際家，家庭の父兄等である。(M)

HISTORIO

KION ONI DECUS SCII PRI LA HUNGAROJ, de Dr. Kun Andor, trad. de Emeriko K. Kovárcz, eld. de a Magyarok Világkongresszusa Állandó Szervezefi Irodája, Budapest, 1938; 11×15cm, 34p.

右すべきか左すべきか——delikata な國際的動きのなかにたちまよう中央ヨーロッパの小國家群のうちにあつて，まつさきに旗標を明かにして防共樞軸へ加わつたハンガリアーこの國からは，多くの elmigrintoj が出ている。國外にあつて，とかく日常の生活に追われがちで祖國のことを考えるひまもないような，それらの人々の心のなかに消え殘つている民族意識の火をかきたてるために，これは，書かれたパンフレットである。建國以來の，帝王，英雄，偉人，藝術家の短かい言行錄のようなものである。(M)

RELIGIO

MALGRANDA KATOLIKA KATEKISMO, de Sac. Jakobo Bianckini, eld. de A. Paolet, S. Vito al Tagliamento, Italujo 1937; 12×17cm, 48p. prezo: 2 l.

カトリクの牧師である著者が，エスペラントで書いた教理問答集。教理以外に，言語の方面から興味をひかれた問答をひとつひく。Kia diferenco estas inter Sakramentoj kaj Sakramentaloj?—Sakramentoj estas de Dio kaj efikas per dia volo, donante gracojn; Sakramentaloj estas de la Eklezio, ne donas gracon, sed per la preĝoj de la Eklezio donas spiritajn kaj korpajn helpojn.

(M)

TURISMO

PER MOTORCIKLO EN TRI LANDOJ, de Gösta Henriksson, ilustrita de Rud. Demuth, eld. de Eldona Societo Esperanto, Stockholm, 1939; 13×19cm. 38p. prezo: Kr. 0.75

男 3 人，女 1 人の樂天家ぞろいのエスペランティストたちが，2臺のモーターサイクルに乘つて，チェコの samideanoj をたずねて行つて歸つた 2 週間の旅行の記錄。汽船でデンマークへ渡り，それからドイツをとうつてチェコへ。そのあいだの aventuretoj のかずかずが，插繪入りで輕く書きつづつてある。文章もすらすら書けている。(M)

BRUGGE (BRUĜO), BELGLANDO, eld. de Oficiala Servo por Turismo, Halle, Markt Brugge, Belgujo, 10.5×24cm.

前國王レオポルド二世は「全市が宛然博物館をなしている。この市の雰圍氣と魅力とは

獨特である。これは價しれぬ寶石である」と激賞したブルージュの觀光案内書。この市の美術品，建築物の寫眞を滿載してある。(M)

BUDAPESTO, eld, de Budapest Székesfőváros Idegenforgalmi Hivatala, Budapest, V., Deák Ferenc-strato 2.

「ダニューヴ河の女王」ブタペストのエスペラント觀光案内。美しい景色の寫眞をたくさん，きれいなグラヴィア版で印刷してある。

MOVADO

JARLIBRO DE LA LINGVA KOMITATO KAJ DE ĜIA AKADEMIO, 1939; 12×15cm. 43p.

會長 Isbrücker 氏，その他各部長の報告が載つているが，Isbrücker 氏が，報告のうちで，語根の品詞性に關して，Saussure の說を支持しているのに並んで，「一般語彙」部長 Bailey 氏が，「語根に品詞性なし」と言つているのは注目をひく。Bailey 氏は，その說の根據として，ザメンホフの著作を支配する彈力性の原理をあげ，また，ザメンホフの言葉 "Nia lingvo ĉiam devas esti simpla kaj facila." そのほかをひいており，品詞性のあり得ない例として，genuiĝi, paciĝi 等が，iĝi genuo, iĝi paco でないことを指摘している。審査部長 Rollet de l'Isle の報告には，定期刊行物に載せられた記事には，最近文法上の誤りが次第にすくなくなつたとある。(M)

言葉と兵隊

戰線だより

第 1 信

僕たち大陸に居る兵に最も不便を感じているのは言葉のわからぬことです。實は僕も現地で勉强したら支那語とて難しいことはあるまいと思い，「支那語四週間」を買つて來たのですが，異動する度ごとに發音のちがうのには全くまいつてしまいました。たとえば，「學校」も，土地によつて，「ショーシヤオ」，「ヤヨオ」，「シャーチョ」といつたぐあいです。十里も離れたらもうだめです。こんなとき，エスペラントでも普及されていたならと，つくづく考えさせられています。なんといつても，自分の意志を相手にわからせ得ないほど情ないことがあるでしようか。いな，情ないだけじやすまないです。肝腎の自分の用が足らぬのですから，そんなわけで現在の皇軍はあらゆる點についてどんなに苦勞しているかわかりません。

「トントンデーブトン」――これは，「てんでわからん」とゆう意味の皇軍用支那語で何を言つても「トントンデーブトン」の連發です。

言語の不通が宣撫工作にあたえる障害は想像以上のものがあるようです。僕がかかる悪筆を振うのも全く支那語とゆうものにまいつたからです。

第 2 信

支那人に分らぬ支那語，僕等から考えて全く不思議な支那語，「汽車」（日本語の「自動車」のこと）の發音に「チヤァー」，「チサー」，「チセー」，「チソー」等，々，種々に發音される支那語，標準語が地方に通用せぬ支那，もしこれがエスペラントでもあつたらと，つくづく考えさせられます。とともに，ますますエスペラントを廣く普及せしめねばならぬとゆう感に胸一ぱいになります。

第 3 信

「柴門霍夫」――これが，何のことかわかりますか。

支那の「學生小辭匯」の「世界語 (Esperant)」（語尾 -o がついていません）の項に曰く，「波蘭柴門霍夫所發明希望成通行世界的公共語言」とあります。つまり，「柴門霍夫」とはザメンホフ博士のことなのです。同文とは言え，日本語と支那語では全く千里の彼方にあります。

桃の花咲く中支にて

沼 畑 忠 彦

LA REVUO ORIENTA

Junio 1939 Jaro XX N-ro 6

舞臺で Kato manĝas raton.

新協の「神聖家族」まるでエスペラント宣傳劇

赤木蘭子が，小澤榮を相手にエスペラントの個人敎授をやつている——新協劇團の4月公演，久板榮二郎氏の「神聖家族」の1場面。「猫は鼠を食べる」と，小澤がしどろもどろでやるのに，觀客は微笑を禁じ得ない——そこへ彼は呼びかける：「エスペラントは世界中に通用する！」

座席をはみ出した觀客は，通路にすしづめの超滿員——幕があくと，"Kato manĝas raton. 猫は鼠を食べます。Ĉu katon manĝas rato? 猫は……猫を，鼠が食べますか。Ne, kato manĝas raton, sed katon ne manĝas rato. いいえ，猫……は……鼠をたべます，しかし,……猫を，鼠はたべません。……」——主役フキ子(赤木蘭子孃)のまえに坐つて，その良人，印刷工の粂之(小澤榮氏)はしどろもどろである。觀客の多くは，それが何語であるか，恐らく知るまい(外國語をよく知つているのが，イタリア語かなと首を傾けただろう)だが，この光景をほほえましいものに見ていることは，そこここから，洩れる低い笑い聲で想像される。"Mia patro estas malriĉa laboristo, kaj li laboras en iu fabrikejo, kvankam li estas maljuna." フキ子がつぎを讀んできかせる。赤木孃の讀みぶり——これはすばらしく流暢だ。そしてまた實に美しい發音だ。觀客は，まるで詩の朗讀でも聞いているかのようにうつとりしている。ところが，粂之にはうまく讀めない。今日晝の休みに豫習しておく約束であつたのを，キャッチボールをしてサボッたのである。フキ子は，そんなに怠けるようではだめだからやめようと怒る。粂之はあわてて，辯解につとめる。そしてゆう。「エスペラントをやつてると，會社で話したら，みなうらやましがつて，『ぼくもやりたい』『ぼくもやりたい』と言つてたよ。課長さんも,『何しろエスペラントは世界中どこへ行つても通じるんだからなあ』といつてほめていた」だから，ぜひつづけてやりたいと一生懸命である。



これは4月18日から5月7日まで築地小劇場で上演された久板榮二郎氏の「神聖家族」第二幕第二場で，東京朝日の劇評欄でも上泉秀信氏が「二幕第二場の二階で亭主の粂之にエスペラントを教えるところは微笑ましい情景である」と言つている。

「神聖家族」は「新潮」5月號に載つているが，築地で公演したのは，村山知義，瀧澤修，松尾哲次諸氏の協力で改作したもので，雜誌に發表の

ものには,「フキ子が兼之にエスペラントを教えているそうだ」とゆう話が出るだけであつて，この第二場は改作にあたつて，全然新しくつけくわえたものである。しかも，全篇を通じてこの場面が最も成功していて印象的であるが，さらに，最後の第5幕のクライマクスにおいても，兼之の義兄の小說家松島——この劇において，作者の意圖を說明するような役割を持つた存在で，瀧澤修氏が演じている。——に,「どうです，またエスペラントではじめては？」といわせて，印象を一層強めさせているため，まるで，エスペラント宣傳劇の觀がある。

この劇は6月には下記のとうり關西公演が行われるはずであるから，友人を多く誘つて見に行けば，エスペラントのため，非常によい宣傳になるであろう。

15——19日　大阪朝日會館
20——22日　京都朝日會館
24——25日　名古屋朝日會館

第16回九州エスペラント大會

來年度日本大會を宮崎へ

第16回九州エスペランチスト聯盟大會は豫定通り4月16日午前10時から久留米市公會堂で開催された。折りからの春雨を衝いて時局下緊張の色も濃く，吾が綠の戰士は大牟田，宮崎，下關，福岡，八幡，佐賀，熊本等の各地より陸續と集合，忽ち參加者は四十有餘名を算し，會場は全く感激の坩堝と化した。

先ず準備委員山市眞慧氏の「開會の辭」に始まり東方遙拜，國歌合唱，大會々長推薦に移り地元より九州醫專教授磯部幸一氏が會長として推され一場の挨拶あり，次いで「エスペーロ」の合唱に目頭を熱くし學會其他各地より祝電の披露に應えて拍手殷々。かくて聯盟參加地方會代表者の挨拶がつぎのやうにあつた

福　岡エス會——野見山丹次氏
八　幡エス會——宍戸圭一氏
熊　本エス會——加藤孝一氏
大牟田エス會——柴田辰男氏
（中川年男氏通譯）
宮　崎エス會——巣山毅氏
熊本醫大エス會——板倉主計氏
評　議　員——野原休一氏
九州醫專エス會——今成敏夫氏
久留米エス會——寺崎敏行氏

以上挨拶が終れば時刻は丁度11時半，午前中のプログラーモを了えて休憩に入り，公會堂正門玄關にて喜々として記念撮影を濟まし續いて市役所地下室食堂へと中食のため一同足を運ぶ。——談笑裡に晝食を終り少憩の後再び會場へ。午後一時より議事に入る。全員一致で大牟田エスペラント會會長植田半次氏を議長に推擧し，書記には九醫エスエペラント會の今成敏夫氏，宮崎エスペラント會の巣山毅氏が任命されそれぞれ着席，いよいよ協議に移る。

提案事項第1　每年KEL大會ノ際普通學力檢定試驗ヲ執行ノ件，附右ニ關スル事務ハ大會開催地ノ團體ニ於テ當ル
（福岡提案）

提案事項第2　エスペラント學力檢定試驗施行細則（2）ノ（C）ニ準ジ普通學力檢定試驗ヲ本年中ニ臨時施行スルノ可否決定ノ件
（大牟田提案）

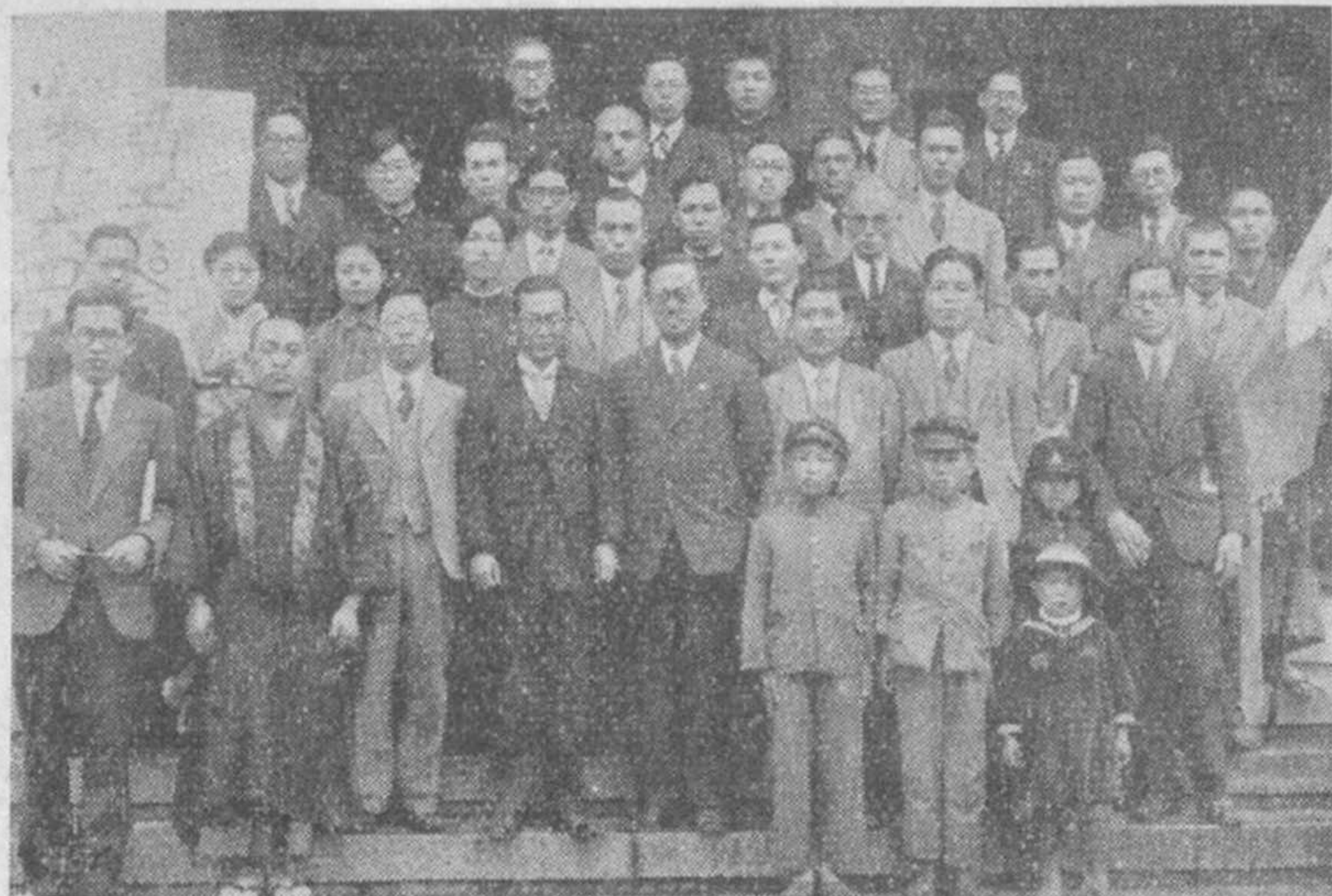
提案事項第3　大會ニ於テ施行スル學力檢定試驗委員ヲ豫メ任期ヲ定メテ中央ノ試驗委員ニ任命方申請ノ件
（大牟田提案）

以上3項を取り纏め討議する旨議長より申渡されそれぞれ提案者側より說明の後全員により熱心に檢討され遂に次の如く決議された

決議　明年度ヨリKEL大會開催地ニ於テ普通學力檢定試驗ヲ施行シ豫メ臨時試驗委員トシテ次ノ9氏ヲ聯盟ヨリ中央試驗委員ニ申請ス

九大教授　大島廣氏
同　伊藤德之助氏
同　江崎悌三氏
九醫教授　磯部幸一氏
長崎藥專教授　植田高三氏
宮崎高農教授　日野巖氏
佐高教授　菊地行藏氏
熊工教諭　山本齊氏
野原休一氏

提案事項第4　第15回KEL大會ニ於テ



募集シタル寄附金處分ノ件
（大牟田提案）

昨年大牟田に於ける大會の際募集しに寄附金は未だ處分を見ていなかつた故此處にその使途に就き協議された譯である。

決議　第15回KEL大會ニ募集シタル寄附金拾圓也ハ學會文化宣揚部ニ寄贈スル

提案事項第5　第7回KEL大會ヲ宮崎市ニ招待ノ件　　（宮崎提案）

代表巣山氏より説明あるや全員一致嵐の如き拍手を浴びて可決される。なお此の時大阪の日本エスペラント大會準備委員進藤靜太郎よりの依頼により明年度日本エスペラント大會を併せて宮崎市に招待せられ度き旨議員より説明あり，聯盟としては意義ある紀元二千六百年の紀念事業として大和民族發祥の地たる宮崎市に日本エスペラント大會の開催を絶對に支持することとし感激の拍手に一段の緊張を覺えた。ここで巣山氏より日本大會の招請は此の場にては決し得ず宮崎エスペラント會に傳達し許議の上確答の旨聲明があつた。

決議　明年度第17回KEL大會ハ宮崎市ニ於テ開催ス，ナオ日本大會ガ併セテ開催サルル場合ハ聯盟トシテ支持ノコト

提案事項としては他に久留米より聯盟本部の移動が事務上不便の理由を以て一定の場所に置くことや夏期講習會を大規模に名勝の地で開催しては等があつたが結局時期尙早のかどで何れも否決となつた。又野見山丹次氏は飯塚市より福岡市に轉住學會福岡支部幹事として就任せられたる旨發表あり。かくして全員の熱誠なる討議は順調にプログラーモを進め嚴肅裡にタギージョを合唱次で閉會となる。時に午後3時18分。

準備委員の意圖としては晩餐會前に久留米市内の觀光を計畫してゐたが，雨に妨げられ遠來の同志には申譯が無かつた。止むなく直ちに晩餐會場旭倶樂部へと三々五々雨の中を出發する。

晩餐會

時間稍早目のため會場では圍碁さては將棋雜談等思い思いに時を過すことしばし。

軈て一同着席，山市氏の粗餐への挨拶があり，續いて磯部氏を發頭に各自の自己照會が終ると座はいよいよくつろいで來る。このとき晩餐半ばではあつたが嘗てレヴオ誌に發表を見た小坂賞第一回受賞者野原休一氏を出して吾が九州エスペランチスト聯盟は大いに面目をほどこしていたが氏の榮譽と歡喜を記念すべく有志の發案に全員の飛びつく樣な賛助を得ていたので此の席上久留米名產藍漆器の粗品は會長磯部幸一氏の辭にて野原氏へ贈呈せられた。野原氏の謝辭あれば拍手止まずこの劇的情景は深く ĉeestantoj の腦裡に刻まれた。次に久留米觀光協會より派遣の案内係加藤，堤兩孃の美聲で，水天宮，高山彥九郎，肉彈三勇士の説明があるや一同は持てる箸さえ措いてうつとりとなる。續いて餘興の時間——各自の隱藝續出し，春の宵の更けると共に愈々會場は gaja となり和氣藹々，午後9時盛會裡に閉會。

本大會は前年大牟田市に於ける大會の際久留米エス會が引き受たのであつたが其の後1-2の原動力的會員を失い，一時は全く開催不可能とまで思われたにもかかわらず斯くも大成功を收め得たのは實に大牟田エスペラント會の植田氏をはじめ西原氏其の他の親身も及ばぬ御援助の賜であり，各地同志の協力と共に深く感謝している。

（久留米エス會報道）

各地報道

原稿は 20 字詰に！
締切は毎月 1 日着便

東海道

金子美雄氏送別會

〔名古屋エス會〕 金子美雄氏東京へ御轉任の報に接した私達は事のあまりに突然なのにただぼう然としてしまつた。六年の長き間 NES のよき Gvidanto として何につけても一番のたよりとしていた氏を今失うことは我々にとつては大きな痛手である。しかし私達は私達の都合のいいことばかりを考えてはいられない。今度の御榮轉は氏の一生にとつて重大なる意義を持つものであり，氏のために喜んで御送りしなければならない。それで我が NES は 4 月 25 日午後 7 時より公園資生堂二階に於て氏を送るための會を持つた。出席者 20 名。

小坂先生のユーモアを交へた Parolado についで白木氏の溫情あふるるが如き御挨拶あり，それに答えて金子氏は名古屋を去るの感懷を述べられる。

話はやがて氏を中心とした思出話に入り ĉeestantoj こもごも立つて感想やら思出やら將來の抱負やらを述ぶれば金子氏は再び立つて氏の名古屋に於ける Esperanta vivo に關して細々と話して下さる。やがて小坂先生の "Malnova tempo" の獨唱を皮切りに高松，丹羽，內藤の諸氏得意の獨唱を披露し，生暖かき春の夜のつどいは何時果つるとも知れなかつたが最後に一同 Espero を高唱して會を閉じた。送る人，送らるる人共に無量の感慨を抱いて春の夜の舖道に出たのは正に 10 時。

因に金子氏の新しき御勤務先は厚生省である。

尙從來の白木氏宅に於ける輪讀會は講師金子氏御轉任のため一時中止する事になりました。金曜日の小坂先生宅に於ける研究會は引續き行われていますから皆さんどうぞこちらの方へ御出席下さい。Teksto は "Revizoro."

(*Ŝ. Isobe*)

近畿

支部活動再燃

學會神戸支部 本支部は昨年の春，神戸エスペラント協會員中の學會員有志の發起に依つて第 1 回の會合が開かれ，支部代表として生駒篤郎氏が選任されたが，間もなく生駒氏他縣轉任の爲に責任者を失い，其後何等の活動をも見るに到らず，今日に及んで居たものである。

然るに最近有志間に支部活動の希望再燃し宮本新治氏の活動に依つて，去る 3 月 18 日午後 6 時より，新開地松竹劇場食堂に於て，本年第 1 回の會合が催された。

出席者，月本喜多治，前田健一，橋詰直英，宮本新治，永井海乘，坂內正二，島津次三雄，澤甚一，宮川省三，湯川良彥

定刻より少し遲れて全員の出席を待ち，食事を共にし乍ら大體次の如き事項の決定を行なつた。

1. 新任支部代表……宮本新治氏暫定的受諾。
2. 毎月會合期日……大體第 1 月曜。



3. 方法……當分懇親的に夕食會談を爲し回を重ねるに從つて，研究運動其他の方法を具體的に定める事とす。

尙 4 月 10 日には，同一要項に依つて第 2 回の會合が行われ，新に次の事項が決定された。

新任支部代表　永井海乘

（宮本氏多忙の爲,前に決定の暫定的支部代表を辭退するに及び，昨秋來南支戰線に在り最近無事歸還の永井氏が推され，未だ戰場の疲勞癒えぬ身に鞭つて起つことになつた。）

當日出席者

前田，宮本，永井，竹山寛，坂內，橋詰，月本，島津，湯川，難波金之助氏及進藤靜太郎氏

當夜は全く思いがけなく，岡山の古い同志難波金之助氏の出席を迎え，又進藤氏も出席されたので，甚だ盛んな愉快な會であつた。因みに尙神戶支部は，今後も大體從來通りの要領に依り，每月第 1 月曜夕 6 時半頃より，新開地松竹劇場食堂に於て開催の豫定であり一般在神同志其他の出席を歡迎する。會費は夕食費大體壹圓。更に詳しい問合せは下記へ願います。

神戶市須磨區飛松町三丁目五八　永井海乘
（電話須磨 (7) 2200 番）

九　州

〔學會福岡支部〕 **支部代表者變更**　4 月 1 日支部代表者更迭し野見山丹次氏が新任した。同氏は舊臘當地へ轉任されるまで飯塚エスペラント會長として活躍された方である。住所次の通り

福岡市外箱崎町學生ホーム內
野見山丹次

4 月 24 日代表者宅に幹事會を開催し 5 月より初等講習會開催並に支部月例會開催の件を決定した。

北 海 道

聯 盟 近 況

〔北海道エス聯盟〕 4 月 10 日常任委員相澤君小樽市訪問。幹事高橋君福田君と會談聯盟の今後の方針，大會議題等につき語る所あつた。

4 月 14 日札幌エスペラント會のザメンホフ記念日を兼ねて大會の準備委員會を開催した。

4 月 22 日大阪市進藤靜太郎氏金 20 圓也を本聯盟に寄附せられた。同氏の熱烈なる御後援にはただ感謝の外はない。

4 月 22 日鶴岡市後藤氏より再び金 50 錢の御寄附があつた。進藤氏後藤氏の御好意に對して我等ますます志を固くして Nia Movado のために猛進する決心である。

會員移動　情野鐵雄氏(札エス)山形工業學校へ轉勤された。相澤治雄定山峽鐵道會社へ轉勤。新田爲男君(三井)は入營されました。

(HEL 本部報)

ザ 忌 祭 座 談 會

〔札幌エス會〕 雪深い北國の街にも漸く春が訪れて來た。まさに待望の春とゆうべきである。札幌エスペラント會の Membroj は元氣一杯でこの春を迎えた。例會は每週木曜日——4 月 27 日までに 13 回の集會を持つた Teksto は "Universala Legolibro." 目下 § 22 El' la poŝto を輪讀研究中。

ザ忌祭座談會——4 月 14 日千秋庵別室に札鐵エスペラント俱樂部と共催にて開く。出席者高瀨，相澤，前田，佐藤，長田，白川，永見，秋田，福原，宍戶，阿部の諸氏にて主に北海道大會準備委員會の協議に費やされた。

札商グループ誕生——本會員中最年少の熱心な永見君は札幌商業 5 年在學中であるが，以前からの念願が適つて今回漸く同君の努力が結晶するに至つた。會合は 5 月初旬より每週 2 回の豫定。

ザメンホフ博士忌祭

〔小樽佛敎エス會〕 小樽エスペラント協會と共催で4月16日午後7時から量德寺內書院でザメンホフ博士忌祭を開催。出席者藤川，脇

坂，村田，福田，高橋，江口，桐野，竹内，佐藤の諸氏。開會に先立つてタギージョ齊唱，續いて藤川氏開會の挨拶あつて記念祭が進められ，直ちにザ博士を偲ぶ有志所感に移り，先づ高橋氏は流暢なエス語で記念祭に就いて所感を述べれば一同しんとして耳を傾け，次ぎに村田，桐野兩氏熱心にザ博士の精神を交々語り，又愛嬌たつぷりの表情で江口氏はエスペラントで感想を，竹内，佐藤兩孃はエスペラント學習の經驗を順々と述べられた。

この時病床にある佛教エスペラント會長岡崎氏から「記念祭に出席出來ぬは甚だ遺憾であります。出席の皆様によろしく傳えて下さい」との使いがあつたので，參加者一同の名で氏を慰撫激勵する意味で當夜の模様と挨拶狀を送つた。病床にあり乍らもエスペラント運動に對する心遣りは參加者一同を痛く感激させた。

暫らくバビつたのち脇坂氏進行係で「エスペラント運動並にザメンホフ博士を語る座談會」に移り，先陣を承はる高橋氏は日本固有文化の海外宣傳に就いて縷々説明，次ぎに桐野氏はエスペラントを宣傳するにはエスペラント會内に別働隊とも言われるエスペラント野球團體，音樂グループ，或は外國語學習の會（支那語英語等を設けて一般の關心を呼ぶ等，その他參會者交互にエスペラント運動又はザメンホフ博士の思想に就いて餘す處なく語り合い，いつしか時間は經ち，アムザージョを割愛した。

力強く「エスペーロ」は鳴り響く，と共に一同はこれに和し，餘韻未だ消えやらぬに竹內孃起つて眞摯に滿ちた「閉會の辭」あり，この意義ある會合はなごやかに幕を閉ぢた，時に 10 時 15 分。

〔小樽佛教エス會〕 3 月 29 日札幌東本願寺北海教務所內佛教青年聯盟から，同總會參加方招請あつたので，代表として脇坂圭治氏を派遣することにした。提出議案として「佛青聯盟內に海外部設置の件」尙當會として同聯盟に未だ加入していなかつたのであるが今回の參加方招請はその方面に佛教エス會の存在が認められたわけであらう。

滿洲

伊藤氏來訪

〔新京エス會〕 住吉宅短期講習終了後目下引續中等講習中。毎土曜日例會も繼續出席數名。4 月 15 日學會新京支部（荒川氏宅で）ザメンホフ祭開催。參加者 6 名，ザ祭を期し，支部長荒川氏新京日日新聞へ「言語ト國防」を執筆，大阪の同志伊藤幸一氏來京，數日間滯在。（新京エスペラント會 adreso：新京市祝町 2 の 14）

個人消息

☆結　婚☆

宮城音彌氏と磯部幸子孃

文理科大學講師，慶應大學神經科教室宮城音彌氏と磯部幸子孃とは田中穗積博士の媒酌で結婚，5 月 13 日東京會館で華燭の典をあげられた。慶賀の至りである。

森惠美子孃（大阪） 3 月結婚，上京された。

鈴木　博氏（東京） 3 月結婚された。

☆誕　生☆

佐々城佑氏（學會理事） 4 月 16 日次男出生，開（ヒラク）と名づけられた。

☆榮　轉☆

田　　誠氏（學會理事） 國際觀光局長をやめ，華中交通會社副社長に就任された。

福原滿洲雄氏は，九州帝國大學教授に任ぜられた。

金子美雄氏（名古屋） 上京，厚生省へ入られた。

木村康一氏 上海自然科學研究所から，京都帝國大學醫學部に新設の藥學科へ。

☆ 海外旅行 ☆

倉地治夫氏米國へ

別項（p. 21）記載のとうり，社命を帶びて，5 月 11 日横濱出航の龍田丸でアメリカへ。約半ケ年滯在の豫定。

☆ 大陸進出 ★

山縣光枝孃 5 月 1 日東京驛發新京へ。

★哀　悼★

三石氏嚴父 學會常務理事三石五六氏嚴父伊三郎氏は，4 月 16 日沼津で病歿せられた。なお同地に靜養中の三石氏は漸次快方に向われている。

同志の出征，凱旋等については，防諜上，發表をさしひかえることにしております。あしからず。

SUR LA ĴURNALISMO

新聞雜誌とエスペラント

新　　聞

大阪朝日 3. 31「防共エス語聯盟――日・滿・獨・伊・洪五ケ國で結成へ」――大阪・京都・和歌山方面のエスペランチストによつて計劃されつつあると報道。（田中達雄氏報）

報知新聞 4. 14「世界を驚歎さす日本書紀のエス語飜譯――野原氏卌年の努力に輝く小坂賞」――日本書紀完成と小坂賞第1回受賞者決定について，旣刊エスペラント譯「日本書紀」4冊の寫眞および野原氏の肖像入りで，社會面トツプに大々的に報道。

（安達榮一氏報）

中外商業 4. 14「日本書紀のエスペラント譯――野原氏に初の小坂賞」――おなじく，書紀寫眞，野原氏肖像入り大々的に報道。

（同氏報）

國民新聞 4. 14「エス語の小坂賞初の受賞者決る――"日本書紀"の野原氏に」――うえに同じ。（同氏報）

讀賣新聞 4. 14「エス語版日本書紀――十九年掛り飜譯の勞酬はれて野原休一翁へ小坂賞」――野原氏肖像入。（同氏報）

都新聞 4. 14「エス語"小坂賞"野原休一氏へ」――うえに同じ。（同氏報）

東京朝日 4. 14「ニユース縮刷版」に，野原氏肖像入りで「エス語の『小坂賞』」――學會日本文化宣揚部新設と野原氏の受賞。

（同氏報）

中央新聞 4. 14「エス語協會小坂賞の受賞者」

大阪朝日 4. 14「エス語貢献者に小坂賞を設定・初の榮は野原翁」――野原氏肖像入り

（田中達雄氏報）

大阪時事 4. 14「世界の驚異・エス語『日本書紀』月末大阪の大會で野原翁へ授賞」

大阪每日 4. 15「エス語の小坂賞初の受賞者野原氏に決る」

東京朝日 4. 14「新フランス通信――澁澤敬一」中に，「猫と來たら……神戶でニヤー，フランスでミヤウと鳴くは人間の耳だけで，猫にはちやんとエスペラント以上の國際語がある。」

京城日報 4. 15「話題特急」欄に，學會の日本文化宣揚部新設と小坂賞第1回受賞野原氏について。（岡本好次氏報）

高知新聞 4. 15「第廿七回エスペラント大會小坂賞授與式・受賞者は野原休一氏」

野原氏の小坂賞受賞に關する記事は，このほかにも，全國の新聞に出たはずですから，お氣づきのかたは切拔きをお送りください。御都合によつては，標題と內容の概略をお知らせくださるだけで結構です。

九州日日 4. 17「九州エス語大會」――4月16日久留米で開催の第16回九州エスペラント大會について報道。

東京朝日 4. 21（夕刊）劇評「運命の一女性（新協劇團の神聖家族）――上泉秀信」に「二幕第二場の二階で亭主の弟之にエスペラントを敎へるところは微笑ましい情景である。

東京朝日 4. 24「萬葉集の飜譯（日本文學の飜譯・二）――茅野蕭々」に「（萬葉集を）啻に英語のみではなく，て獨佛伊その他の國語又はエスペラントへの移植をも歡迎する」。

雜　　誌

映畫の友 5月號「白痴の悅び」――MGM映畫の紹介記事のなかに，この映畫の會話にエスペラントの用いられる部分のあることを記述。

カタカナジダイ 4月號「カタカナ ウンドウ ト エスペラント――イウウ コウイチ」――日本語の世界的進出は，カナとエスペラントで。

同　上 同號「ダイ 27 カイ ニホン エスペラント ダイカイ――4ガツ 29–30 ニチ オウサカシ デ ヒラカレル」

興　正 4月號「花下秉燭一夕談――高橋邦太郞」に「天上と海底の探檢〇へロルド・デ・エスペラントより」

新　潮 5月號「神聖家族――久板榮二郞」に「フキちやん」が「エスペラントを弟ちやんに敎へた」とゆうところがある。（賀川庸夫氏報）

小坂賞基金寄附者芳名 (*6*)

3月1日から3月31日まで

——受付順〔敬稱略〕——

		圓
奉天	高木貞一	20
大阪	三品幸	2
大阪	本郷秀規	2
中支	土師孝三郎	6
横濱エスペラント協會		6
第16回九州エス聯大會		13
横濱	足立長太郎	2
大阪	兒島壯一	3
大牟田	中川年男	2

計	56
×	.50
	28.00 円
前月まで	1365.50
	1393.50 円

小坂賞委員會

專用振替東京 20767

日本文化宣揚部への寄附

金10圓　第16回九州エスペランチスト聯盟大會

本郷だより

大會もおわりました。公式の Protokolo は，この號には，まだまにあいませんので，とりあえず參加記をのせました。

來年の大會は宮崎で。もちろん皇紀2600年を祝う意味で，この土地がえらばれたわけです。

ぜひ全國からおうぜいでおしかけて行きたいものです。そのつもりで，いまのうちから，日のくりあわせ，その他を考えておかれることが望ましいとおもいます。

それと，この大會を，日本のエスペランティスト全體で支持して，最も大きな成功をかちえるようにするため，その費用は，なるべく，全國のなかまで負擔したいものです。

☆

來月號で，小坂さんの「前置詞略解」がおわります。これは，いずれ1册にまとめて，出版したいとおもつております。

しばらくぶりで「新刊紹介」をのせました。洋書の輸入が困難になりましたので，せめて，新しく出る書物の內容の紹介なりとくわしくしたいとおもつておりますが，いろいろ手がまわりかねております。

☆

たびたびくりかえすことですが，海外の同志と文通するにあたつては，その內容については，よくよく御注意ください。

せつかく國のためにとおもつてやつていることが，かえつて反對の結果を來たすことがあります。

軍事國防に關することについてはゆうまでもないことですが，產業，交通などに關することも注意しなければなりません。特にそれらに關する數字をあげることは絕對にさけなければなりません。

なるべくならば，所轄の憲兵隊あるいは警察などと連絡しておいて，特に先方の質問に對する答えなどは，まえもつて一應檢閱してもらつておかれると，好都合とおもいます。

わずらわしいようではありますが，この事變下にあつて國際的に活躍するには，この程度の愼重さは忘れてならないことです。

4月中學會訪問者：—— 小西紀生氏(名古屋)，淺野孝氏(名古屋)，村上幸雄氏(名古屋)，中西義雄氏(岸和田)，小坂狷二氏(名古屋)，宮島桃平氏(新潟)，小野田幸雄氏(大分)。

學會會費

正會員	(1年分)	3圓
賛助會員	(同)	5圓
特別會員	(同)	10圓
終身會員	(一時金)	100圓

每月一回一日發行　エスペラント　第七年第六號

昭和十四年五月十日印刷納本　昭和十四年六月一日發行

編輯兼發行人　大井學

印刷人　竹田佐藏　東京市神田區三崎町二ノ四

印刷所　一匡印刷所　東京市神田區三崎町二ノ四

定價一部20錢・送料5厘

6月分 1圓20錢・送料共
1年分 2圓40錢・送料共

發行所　財團法人日本エスペラント學會　振替東京11325
東京市本郷區元町1丁目13番地4　電話小石川5415

エスペラント習講所

昭和 14 年度第 2 期生募集

初等科

期間	5 月 2 日から 7 月 7 日まで
時間	毎週火，金曜午後 7 時から 9 時まで
講師	學會評議員　大崎和夫氏
教材	エスペラント讀本（30 錢）
會費	全期分前納 3 圓（本會會員は 2 圓 50 錢）

中等科

期間	5 月 1 日から 7 月 6 日まで
時間	毎週月，木曜午後 7 時から 9 時まで
講師	學會評議員　馬場清彥氏・伊藤巳酉三氏
教材	エスペラント中等讀本（30 錢）
會費	全期分前納 3 圓　本會會員は 2 圓 50 錢）

高等科

期間	5 月 6 日から 9 月 19 日まで
時間	毎週土曜日午後 7 時から 9 時まで
講師	學會主事　三宅史平氏
教材	ザメンホフ讀本（50 錢）
會費	全期分前納 4 圓（または 2 圓づつ 2 回に分納）（本會會員は全期前納 3 圓）

會場　本會講堂
申込　開講當日受付（なるべく前日までにハガキでお申込みおきください）。

財團法人日本エスペラント學會

☆特典　本學會講習所修了者は，エスペラント普通學力檢定を無試驗で受けることができる。

ふるほん・あんない

English-Esperanto Dictionary
Fulcher and Long 1921 2.50

Esperanto-English Dictionary
Millidge 1922 3.50

Moderna Vortaro Ĉina-Esperanta
Ĉ. Saŭ 2.00

Fundamento de Esperanto
(5-a eldono.) 2.00

La Floretoj de S. Francisko
tr. F. Pizzj 1926 0.40

Viktimoj
Julio Baghy (4-a eldono.) 1.40

Sinjoro Tadeo
tr. A. Gralowski. 19.8 10.00

Lilio *(originalo) E. Al'eyne Sinnotte, F. B. E. A.* 1.00

Makbeto *tr. D. H. Lambert. B. A. 1908* 2.00

世界語辭彙　文法附　全（再版）
日本エスペラント研究會編 3.00

☆以上わ在庫品の一部です。先月からひきつゞいて毎月本誌上に目錄お發表する豫定です。★目錄に掲載もれの本も一應弊店え御照會くだされば，おさがしいたします。

買入　えすぺらんと書籍，高價買入いたします。★その他何書にかぎらずかいいれます。★また和洋書おとわず，新古書籍一切の御注文に應じます。★御照會わ下記え

東京市杉並區高圓寺 7-968

賀川書店　振替東京 3479

LA REVUO ORIENTA
Monate eldonata de
Japana Esperanto-Instituto
Japanujo, TOKIO, Hongo-Motomati
Abonkotizo: 4 jen.

昭和七年一月十二日 第三種郵便物認可
昭和十四年五月十日 印刷納本
昭和十四年六月一日發行（毎月一回一日發行）
「エスペラント」第七年 第六號
定價二十錢（送料五厘）

偉業完成

野原休一先生畢生の大業
エスペラント譯日本書紀は
近刊の第五編で完了する。
昭和十年秋それの第一編を
出してからこゝに三年半、
この間にわれらの祖國は
未曾有の時局に逢遇した。
日本民族が全東洋の運命を
擔うて巨きく歩み出す秋
肇國史の國際化完了を見るは
われらの築きゆく新文化の
明日を暗示する吉兆である。

近刊**第五編**におさめるところは、孝德・齊明・天智・天武・持統御五代の歴史である。これらの御宇こそ皇國日本の政治史上に最も光彩を放つ時代。すなはち開卷第一章は英邁中大兄皇子が、聖德厩戸皇子からうけつぎたまふた政治革新の潑剌たる御理念を、孝德天皇の御名のもとに實現したまふた、いはゆる大化改新をもつてはじまる土地と人民との私有を廢し、戸籍を作り、税制を定め、官制を改めて世襲の弊を除き、驛傳の制を設けて普ねく皇威を卒土の濱に及したこの大革新こそ神武建國および明治維新とともに皇室中心精神の最昂揚の場面である

この内政上の一大革新と時を同うして皇軍は北に蝦夷を追うて遠く樺太・沿海州におし渡り、西に百濟救援の師を起して、**大纛**筑紫に進み、かくて皇國日本が再建設され、來る日の「匂ふが如き」王朝文化が約束された。これは實に、われらが今直面する事態の明日――硝煙のかなたに築れゆく新東亜の燦然たる文化をわれらの胸を高鳴らせ、期待させるではないか！

第一編 神代 神武天皇紀
一〇〇頁・價一圓二十錢・送料六錢

第二編 自綏靖天皇紀 至應神天皇紀
一二〇頁・價一圓二十錢・送料九錢

第三編 自仁德天皇紀 至宣化天皇紀
一六八頁・價一圓二十錢・送料九錢

第四編 自欽明天皇紀 至皇極天皇紀
一六四頁・價一圓八十錢・送料九錢